

全国同人雑誌最優秀賞 第16回 まほろば賞 発表

昨年からまほろば賞は全国同人雑誌協会と文芸思潮が主催することになりました。今後もこの形で進めさせていただきますので、どうぞよろしくお願いします。

第一六回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」選考会は、二〇二二年七月一七日に東京都大田区民プラザ会議室において、三田誠広氏、中上紀氏、小浜清志氏、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の四名の選考委員によって慎重に審議が行なわれました。作品ごとに各選考委員が鋭利に批評し、熱い議論が交わされました。厳正な審査の結果、左記のように決定いたしましたので、ここに選評とともに発表させていただきます。

また全国からの読者の投票と寄付による読者賞の投票および内容の結果も併せてここに掲載させていただきます。昨年、「まほろば賞」は受賞作品には、賞状と賞金三十万円（賞金は主に寄付によるものです。また二人同時受賞の場合は、恐れ入りますが、一人二十万円とさせていただきます）および記念トロフィーを贈らせていただくこ

とになりました。河林満賞にもそれぞれ賞状と賞金十万円と記念品を、また読者賞には投票賞金と優秀賞賞金五万円および記念品を贈らせていただきます。優秀賞にも記念品と賞金五万円を贈らせていただきます。

今後も全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈念し、たくさんの同人雑誌の作品が全国同人協会・全国同人雑誌振興会及び文芸思潮に寄せられることを期待しております。

また、どうぞ作品の推薦にもいつそう多数の方が御参加くださるようお願いいたします。また積極的に読者賞への投票に加わっていただき、ぜひ皆様自らの手でこの賞を盛り上げ、育てていただきたいと思います。全国の同人雑誌諸氏の御参加と御支持を切に願います。次第です。

またこの結果及び選評とその感想・批評の動画、また優秀作品はインターネット「文芸思潮」ホームページでも発表される予定です。どうぞ御覧ください。

第16回全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

「光復香港」

〔季刊作家〕99号

鈴木友範

河林満賞

「鴉」

〔南風〕48号

紺野夏子

読者賞

「『よもつ耶』

更待月のこと」

〔札幌文学〕91号

海邦智子

「夢で逢いましょう」

〔朝〕42号

天野いずみ

まほろば賞賞金は、木内是壽氏、故蘭藍子氏、三田村博史氏、来の宮あんず氏、故原石寛氏、夏目日美子氏、前岡光明氏、今田真理子氏、二宮英郷氏、堀井清氏、西島雅博氏、高橋惟文氏、勝又浩氏、越山しづか氏、「北斗」などの御寄付によるものです。ここに厚く御礼申し上げます。また「狐火」「安藝文学」「べん」「海」「文芸中部」など文芸思潮同人誌団体会員の御協力にも厚く御礼申し上げます。



みた まさひろ
1948 大阪生まれ
早稲田大学文学部卒
77「僕って何」で芥川賞受賞
作品はほかに「いちご同盟」
「空海」「親鸞」など
最近の本「遠き春の日々」
「少年空海アインシュタイン時
空を超える」「天海」
日本文藝家協会副理事長
武蔵野大学名誉教授

二作同時受賞

三田誠広

今回は作品のレベルが例年より高かった。とくに二作品の評価が均衡していて二作同時受賞となった。『よもつ耶（更待月のこと）』（海邦智子）は死に近いタクシー運転手の車に次々と乗客が乗り込み、はかない人生のさまざまな局面を見せていくという構成で、リアリズムを超越した幻想的な作風が効果を挙げている。最後に乗り込んできたのは主人公の亡くした妻と子で、そのまま車は黄泉の国に旅立っていくようだ。単なる思いつきの幻想譚ではなく、そこには作者の確固とした世界観、死生観がこめられていて、

揺るぎのない作品世界を構成している。『光復香港』（鈴木友範）はぼくと同世代の書き手で、かつての学生運動と現在の香港の民主化運動を重ね合わせた構成に工夫があった。半世紀前の日本の学生運動を描いた部分は作者の実体験なのだろう。現在の香港を描いた部分も作者の体験から生じたものと思われ、双方の世界にリアリティーがあった。学生運動を描いた作品は多く書かれているはずだが、現代の香港と重ね合わせることで、独自の視点が設定されている点を高く評価したい。

他の候補作も充実していた。『鴉』（紺野夏子）は長く消息を絶っていた父親が、実はつい最近まで存命していた、母親とは文通していたという設定で、娘がその父親の住居を訪ねていくところから始まる。娘にとって父親は過去の人だ。ところが父親が書斎にしていたと思われる部屋の窓の外には鴉がいてこちらを見ている。鴉は父親の姿を探しているようにも見える。そのあたりから、家族とは何かという深く重いテーマが、重厚な文体とともに読者の胸に迫ってくる。『水水母』（木山葉子）も濃密な文体が作品世界を支えている。別れた夫が大量に保有していた学生時代の女友達からの手紙が、ヒロインの胸に癒しがたい傷を穿っている。その過去へのこだわりが、精神を病んだような幻想的な断片が交錯する独自の作品世界へと読者を誘う。リアリズム作品と見ると辻褄の合わない点が多く他の委員

の賛同を得られなかったが、ほくはこの作品の独創性を評価したい。

時代の空気を描いているという点では、『村上君と優のこと』（若栗清子）に注目したい。ロシアのサハリンから来たという金髪の少年と、母子家庭の息子との交流を描いた作品で、ありきたりな差別を受けながらも前向きに生きようとする少年たちの姿が明るく鮮明に描写されている。とくに金髪の少年が髪を黒く染め、日本人の少年が金髪になるといふ展開がおもしろく、小説としての楽しさがあった。『夢で逢いましょう』はいくぶん軽い文体で、不本意な閉職に回された中年女性が、夢と幻想の中にのめりこんでいく姿が描かれている。文体が軽いということはリーダーブルなのだが、それが災いして軽い読み物と思ってしまう。飛ばされる惧れのある作品だ。しかしじっくり読んでみると、幻想にすがらざるをえないヒロインの孤独感が伝わってきた。なかなかの秀作だと感じられた。

他の選考委員の評価が得られなかった『サイクロイド』（荻野央）に、ほくは一つの可能性を感じた。サイクロイドというのは直線上を転がっていく円の円周上の一点の軌跡を描いた曲線なのだが、数学になじみのない人にとって聞き慣れない用語だろう。作者は詩人としての素養のある人のようで、この作品も散文詩と違っていい文体で、断片的な叙述がアトランダムにつながっていく構成になって

いる。それでもテーマはある。二人いる娘のうちの一人が障害をかかえているのだ。ほくは障害者本人や家族が書いた作文コンクールの選考を十年くらい続けているので、障害者の悲喜こもごもの日常については数多くの作品を読んできた。そこにはさまざまな世界観が描かれているのだが、は一致している。この作品にも哲学がある。しかしそれはヒューマニズムとか、運命を受け容れる諦念とかといったものとは隔絶した、きわめてユニークな視点だ。書き手が詩人であり、また数学にも見識をもった人で、そこから詩的な想像力とサイクロイドという図形のもつ不思議なイメージが結びついた、独特な詩的な言辞が次から次へと心地よく紡ぎ出されて、魔法のような作品空間が現出することになる。残念ながら既存詩人の作品を引用したところが二箇所あり、効果を挙げているようではないながら、作品としての独自性を損なっているように感じられる。また詩的なレトリックが高踏的で多くの読者がついていけないという難点は確かにある。だが小説というのは本来、何をどう書いてもいい自由なものだ。読者がどう思おうと、これを書きたいという切実な思いがあれば、書きたいことを書けばいいのであって、作品の評価などは二の次というべきだろう。こういう作品が掲載されるところに、同人誌というものの存在意義があるのだと強く感じた。



こはま きよし
1950 沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87 作家中上健次に師事、マ
ネージャーを務めるかたわら
文学修行
88「風の河」で文学界新人賞
を受賞
他の作品に「消える島」「後
生橋」「光の群れ」「火の闇」
などがある

同人雑誌の質の高さ

小浜清志

今回は七作品と少し多めではあったが、どれも趣があり同人誌の質の高さを覗かせてくれた。

「村上君と優のこと」若栗清子

五月の午後、という独特な書き出しで始まるこの作品はウラジオストックから転校してきた村上ミハイル君と息子の優の付き合いを見守っている母の視点から展開していく。

「私」は二年前に離婚してフラワーアレンジメントの職を得て優との二人暮らしを始めたばかりである。五月の午後に優が友だちを連れてきた様子があったので茶菓子をお盆のせて運んで行ったとき知らない国から来た少年であることを知る。その日から連日のように白金に近い髪の少年は

2DKのわが家を訪れる。

それから半年くらい経って事件が起こった。優が叫ぶ「毎日同じ服を着ている。汚いって、女子が」二枚のセーターを交互に着せていたが女子の目にはダサイ汚いとしか映らなかつたであろう。「私」はすぐに車をとばしてデパートへ。優が心配するほどにブランドの服を買いあさる。この行動もそうであるが、作者の優しさが至る所にちりばめられている。六年生になつてもミハイルは毎日のように通ってきて時々夕飯を共にするようになる。決して裕福な生活をしている訳ではないが、優の友だちということでもミハイルをいつも歓待する心の豊かさは卒業式にも現われる。ミハイルの母親を色々と詮索する声が聞こえる。私はそれらの声に対抗するようにユリアさんの隣りに座り、生まれたばかりの赤ちゃんの可愛らしさを手ぶり身ぶりで伝える。そのような行動をすれば周りから揶揄されるかも知れないが、私にはどうでもいいことで、ユリアさんの孤立に寄り添いたい。その心は優にも受けつがれていて、中学生になりミハイルが「北方領土を返せ」と同級生に言われたことを聞き、ある日突然に黒髪を金髪にする。だが、ミハイルも黒髪に変え、二人向き合ったとき大笑いをして髪は二人とも元に戻るといふ出来事でも相手を思いやる心のあり様がこの小説の美しいところである。

「鴉」紺野夏子

戦の理由を見い出すことはできなかった。

「水水母」木山葉子

水母と海水の明確な区分ができないように、この作品も現実なのか妄想なのか判然としないまま展開している所が最大の魅力であろう。結婚式をあげて三日目に目にした夫の高校時代の女性川島芽子からの大量の手紙から妄想が走りだす。

出張から戻った夫に手紙の束をさし出し処分してと訴えるが、安易に頷いてくれない。仕方なく夫が手紙を焼いていると姑が起き出してきて夫のしていることを咎め、絵里子をなじった。絵里子の目には部屋にある置き物さえ川島芽子の贈り物に見えてくる。手紙に出てくる若村という男が二人の結婚を祝いたいと言って待ち合わせをする。若村らしい男の近くで絵里子は待っていたが、現われた夫は芽子のいる方へかけていき、二人の会話がはつきりと聞こえる。これは不自然な書き方ではないかと思つたが、このことすらも妄想だとすればつじつまは合ってくる。

手紙すら妄想で作らあげた産物ではないかと想像してしまふ。小説の力にあらためて感動した。

「『よもつ耶』〜更待月のこと」海邦智子

当選作になった作品であるが、まず文章とは何でも作りあげることができるのだということに驚いた。この世とあの世の境に建つ「よもつ耶」で練り広げられる男の苦悩。

中学生の時に家を出たままになっていた父の家を見て来て欲しいと入院した母から頼まれ芽子は戸惑う。何十年も前にいなくなっていた父が生きていて、母は連絡を取っていた。芽子は両親のなれせめに想いをはせ、夫婦の有り様の不思議さを感じながら、母の頼みで二度目の父の家の訪問をする。そこで大家さんと出会い父の現状のすべてが解明する。年上の母は代々医者の家に育ち、自らも医師として生きている。母の結婚を祖父母は快く受けとめたが、周りはそうでない者が多かった。だから親類の集まりがあると着慣れないスーツを着て、席の隅でコップを傾ける父を芽子はひっそりと眺めるのが常だった。

のけ者のような父は親類の中ではカラスのような存在ではなかつたか。また、社会的にも立派な肩書きの母とは違い、大工仕事得意な父は母とはあまりにも不似合いただつたから家を出たのではないか。作者の筆は冴え、タイトル通りの読後感を残してくれた。

「サイクロイド」萩野史

大失恋から小学生の頃の団体競技を思い出す。円転するリングの中の自分に接近してくる大空の太陽と雲。くるくるまわるリングの永遠性。そして、二人目の子供が障害を持つて生まれてから、平凡に円転していた生活の連続が二番目の世界に強制的に局限される。色々な挑戦を試みていることは理解できるのだが、円転したことのない私には挑

妻子をガス自殺でなくした男に、真湖ママが釘を刺す。「あんな、後追って死ぬ気でしょ。そんなこと誰も許さないわよ。あんなあの世の扉が開くまで、その日が来るまで生き抜くの、どんなに孤独で苦しくても」

そして、男はよもつ耶の住人となり、タクシーの運転手をして糊口をしのいでいる。客待ちの場所はいつもの坂の上。深夜だというのに老婆が乗り込んでくる。老婆は初雪が降ると死んだ主人の墓参りに行くという。その婆さんが指につけていたアメジストはかつて男が二月生まれの女房に贈ったものだった。

不思議な婆さんに乗せてから一ヶ月位、中年の女性がタクシーに乗り込んで来た。行き先はジャンプ台のある大倉山。女がジャンプ台で練習をしている息子の思い出を淡々と語る。短いラインの文章を残して息子は空へ消えたという。そして、次々と現われる乗客の誰れもが辛い過去をひきづり懊悩しながら生きていることを知らされる。

最後に死んだ女房と息子が乗り込んでくる。心地よいリズムの文と、あり得ないがくつきりと浮かんでくる状況に文学の気高さを感じた。

「夢で逢いましょう」天野いずみ

夢の中で男と交わっていた。夢の中で感じるのは初めてだった。その快感がすさまじかったので、下着にそっと手を入れてみたが、何の変化もなかった。書き出しのインパクトの気高さを感じた。

「サイクロイド」と「水水母」「よもつ耶」「更待月」を高く評価し、中上氏は「よもつ耶」「更待月」と「光復香港」を評価した。小浜氏は「光復香港」を買っていた。私はどれもいい面があり、捨てがたいものがあったので、悩んだが、「光復香港」の重い量感と、「よもつ耶」「更待月」のユニークな表現は、称揚を外すわけにはいかないと思ひ、最後に提案された二作受賞に同意した。このように分裂したのは、それぞれがいい作品であることの証左でもあるだろう。

鈴木友範氏の「光復香港」(「季刊作家」99号)は、出張先の香港で民主化運動の弾圧に巻き込まれていくのと同時に、自身の学生運動を回顧し、反抗の情熱の意味を問いつつ作品である。香港の学生たちの反抗の姿が鮮やかに浮かび上がると同時に、自身の革命へ投じた情熱の挫折の辛酸と苦澁が交錯して、理想に向けて抵抗する人生の陰影が掘削される。結局は圧殺されるしかないその結末に、人間としてどう希望に繋げるか、胸に受け止めるべきものは提出されている。全共闘世代も、今しか書き残せない時期に入っている。さらに書き続けて残すべきものを残していつてほしい。その願いを込めて、「まほろば賞」に強く推薦した。

同時受賞となった海邦智子氏の「よもつ耶」「更待月」(「札幌文学」91号)は、発想が独特で、タイトル、ペンネームからして変わっている。ルビなしでは読めない

クトのすごさに引き込まれた作品だった。

「光復香港」鈴木友範

現代の香港と過去の学生運動をからませた力作である。描写も構成も素晴らしく、私は一番強く押した。香港の有り方もかつての学生運動も歴史に潜んでいる不条理との戦いであるが、それらは時間の流れに淘汰されていくだろうとの予感が、この作品の素晴らしい所である。



いがらし つとむ
1949 山梨県生まれ
早稲田大学文学部文芸科卒
79「流論の島」群像新人長編小説賞
84-90 カンボジアを中心に東南アジアを取材「東南アジア通信」編集長
主著「緑の手紙」(読売新聞・NTT プリンテック「インターネット文芸」最優秀賞)・「鉄の光」「ノンチャン、NONGCHAN / 聖丘寺院へ」「破壊者たち」

重い量感とユニークさ

五十嵐勉

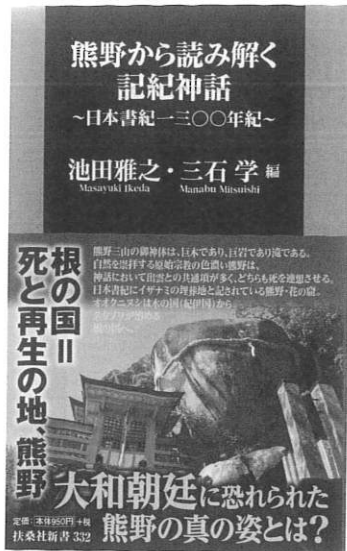
第一六回まほろば賞は、結果的に選考が三つに割れた。

「鴉」「水水母」への支持、「サイクロイド」「村上君と優ること」「夢で逢いましょう」への支持、「よもつ耶」「更待月のこと」「光復香港」への支持と分裂した。三田氏

言葉が、むしろ独自の世界を切り開いている。そしてその風変わりな世界の底に、死へ旅立っていく者の深い悲愁が流れている。この死者を包み込んで流れる旋律に、魅力がある。葬送の美しい調べがあるところに、胸底への刻印がある。これを大事にして、この世界造形を持続していつてほしい。

河林満賞に輝いた、紺野夏子氏の「鴉」(「南風」48号)は、地味な題材だが、彫拓の手腕には、注目すべき力量がある。これで三度目の優秀作登場になるが、どの題材も鮮やかに処理して、小説作品として形を与える技量が高い。しかもだんだん精度が上がっている。一読した時よりも、読み込むに従って、精緻な味わいが奥を増してくる。失踪した父親の最期を、空家に棲む鴉との交誼に託して、枯らせるように終わるシーンは、人生の乾いた一つの結末を象徴している。あの世から、河林満も授賞を喜んでくれていてと思う。

読者賞を獲得した天野いずみ氏の「夢で逢いましょう」(「朝」42号)は、タイトルが一見歌謡曲を想わせる軽さを有しているが、中身をよく読むと、練りあげられたわかりやすい文章の奥に、厳しく磨かれた言葉の艶があり、それが安定した構築を示している。長年の鍛錬による表現力であることが窺われ、酔いに誘われる奏鳴感を宿している。更なる結実をめざして、創作を持続してほしい。



を助け、寄り添うところには共感する。

萩野央氏の「サイクロイド」は、最も難解であり、一般的な読者には少々読みにくさが残るだろう。主人公は、「不完全」な家族を完全にするために、この「円」すなわちサイクロイドを重ねているようで、実はこんな円自体、本当は不要なのだ、叫んでいるのかもしれない。閉じられた円環は美しいかもしれないが、無言Vだと作品は告げる。

木山葉子氏の「水水母」では、夫が処分することの出来ない千通もの女子高生からの手紙が、潮が引いた砂浜に数多に広がる水水母に重なった。水水母は死んでいるようにも生きているようにも見ええるが、過去の手紙もそうである。だから、「ぶちまける」のだ。

選考会が終わると、まだまだ夏はこれからなのに、一瞬涼しい風が吹いた気がした。



第16回まほろば賞選考会風景 2022.7.17 大田区民プラザ会議室で

いる香港学生が、自分の家のヘルパーにはぞんざいな態度をとるというアジア的な矛盾にも注目したい。

もう一作品のまほろば賞受賞作を紹介する。海邦智子氏の「『よもつ耶』〜更待月のこと」だ。子供と妻を失い、夜間のタクシー運転手に転身した主人公が、業務を介して出会った人々から、彼らの物語を断片的に聞いていく。いつしか読み手は、このタクシーが、死にたい人に次々と出会うながら夜を走る、すなわち死と背中合わせの乗り物であることに気づくのだ。

この作品の中に登場する坂の上の（よもつ耶）という磁場は、「黄泉比良坂」から来ている。生者の住むところと死者の住むところの境界にあるという黄泉比良坂。記紀では、火の神を産んで死んだ女神伊邪那美尊を、男神伊邪諾尊が、来るなど言われていたにもかかわらず黄泉の国に追っていき、そうして醜く変化した妻を恐れて逃げ帰り、途中追い付かれ、口論の果てに離縁する場所とされている。だがここでは、愛し合う死者と生者を結び付けるところだ。あるいは、あの世とこの世の間で迷っている者がたどり着くところ。仕事が忙しく一人で悩んだ妻に息子と心中されてしまったという過去を持つ男。男はここを拠点にタクシーを走らせ、待っている。そう、愛する者たちが乗ってくるのを。そのタクシーに乗って三人がどこへ行くかは読み手に委ねられている。あの世か、この世か。妻が伊邪

那美尊のように、まだ来るな、来てはいけなないと、男を黄泉比良坂に留めていた場所は、いずれにしても生半可な所であるはずがない。

「河林賞」を受賞した紺野夏子氏の「鴉」は、他人には絶対に理解することが不可能な、その夫婦だけの独特の関係性が描かれた作品だ。母と別れた父を思い、主人公である娘が鴉と敵対する様子が、人間同士の戦いのごとく生々しく描かれている。家族との繊細な関係、例えば嫌っていた父の作った家具に兄がこだわる場面などは、父への隠れた思いと共に丁寧に描かれ、痛々しさが伝わる。鴉は使者のように不穏な言葉を主人公に告げる。家族でも、いや家族であるが故に介入してはならない領域の存在を黒い羽根で警告するのだ。

他の候補作も読みごたえのある作品が続いた。

天野いずみ氏の「夢で逢いましょう」では、夢の中で起きていることがぼんやりと立ち現れ現実を侵食していく。逃避のように、若い恋の記憶をなぞる夢にのめり込んでいく。現実への一歩を踏み出すラストが素敵だ。

若栗清子氏の「村上君と優のこと」は、ロシアルーツの村上君が光りながら小説に登場する冒頭に、神話的な物語性を感じる。本作が書かれたのはロシアによるウクライナ進攻の前と察しつつも、今であれば異なる形での展開の可能性もあり得ると注目した。また、主人公が村上君の母親

まほろば賞 受賞の言葉 鈴木友範

この度は「まほろば賞」に選出して頂き、ありがとうございます。仕事を言い訳にして筆を折りましたが、更に自費出版した本を眺めて悦に入るとい形で見切りをつけていましたが、しかし、もっと書きたいという思いが突き上がり、数年前から再び原稿に向かって半年に一作を目標にして頑張ってきました。ただ、特にコロナパンデミックのせいで合評会の開催もままならず、先輩諸氏の指導も頂けないという制約のある日々に苛立っていた最中の朗報でした。仕事柄、異なる国々の歴史や文化を見聞き出来たことは幸いでした。当然にも香港現地で目の当たりにした「一国二制度」を巡る聞き合いは、私もまた書かずにいられませんでした。今後も香港を一つのテーマにしていくつもりです。一方で受賞ということを意識せず、書きたいものを書くという原点に戻り、表現者としてさらなる高みを目指そうと決意を新たにしているところです。あらためて感謝申し上げます。

まほろば賞 「光復香港」

鈴木友範



鈴木友範
すずき とものり
1948 岐阜県下呂市生まれ
73 岐阜大学農学部卒業
89 ファインアンドソフトテクノロジー株式会社設立
代表取締役就任
2003 自費出版「愛惜の炎」刊行
05 「季刊作家」同人
21 小島信夫文学賞県知事賞受賞

まほろば賞

「『よもつ耶』
更待月のこと」

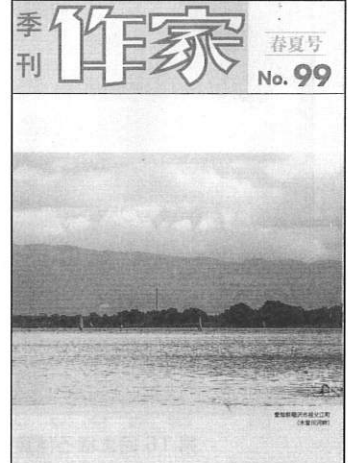
海邦智子



海邦智子
みくに ともこ
1962 函館生まれ
83 北海道武蔵女子短期大学卒業
83 以後(株)札幌ツーリスト、近畿日本ツーリスト(株)、(株)HKワークス、(株)秋吉などに勤務
2004 札幌文学会同人
05 北海道鉄道文学会同人
現在専門学校在学
「愛しき人」で第9回鉄道文学大賞優秀賞受賞

まほろば賞 受賞の言葉 海邦智子

このたびの『まほろば賞』受賞の一報をいただいた時、思わず驚きの声か脳天から突き抜け、歓喜の後の余韻が眠りにつくまで私を包んでくれました。全国の多くの同人雑誌作品の中から優秀作に選出いただいた時点で札幌文学会同人として代表の田中和夫氏、編集人の坂本順子氏に少しは恩返しできたと思っておりましたが、今度こそ本当の恩返しできたと思います。私の創作活動は四十歳で会社を辞めて地元新聞社の文化センター『初めての文章教室』からでした。そこで講師であった田中氏に教を乞い札幌文学会に入会させていただき、諸先輩からの厳しいお声に励まされて今に至ります。十代の頃から友人たちや家族と一緒に過ごすよりも独りの時間が大好きで自身の内面と外面の乖離に途方に暮れたこともありましたが、創作の世界に出会い、今、私は心のままに自由に泳いでいます。私の世界に登場する者たちは全てが愛おしい存在であり、時として主人公になります。今作の主人公も前作『孤灯の下』での登場は『よもつ耶』の住人の一人にしかすぎず、登場は一行にも及びませんでした。そんな「彼」が、私を『まほろば賞』まで導いてくれました。今回の受賞を励みに泳ぎの手を止めることなく、札幌文学会と共に海邦智子の世界を創り上げてゆきたいと思えます。貴協会並びに貴誌の益々のご発展をお祈り申し上げます。ありがとうございました。



河林満賞 受賞の言葉 紺野夏子

まず、選者の皆様にお礼申し上げます。ありがとうございます。ございました。

あらためて河林満さんの経歴を確かめ、私がおその名を冠した賞を頂くにふさわしい者かと考えました。公務員として生計を立てながら創作活動を続け、文学史に残る作品を生み出した方と、平凡な主婦として家庭を維持し、子育てが終わったところからようやく執筆活動を始めた自分が、どうにも繋がらないのです。

ただ、「私の文学世界」に記されている、「小説にはいい小説と悪い小説があるに過ぎない。自分に切実なものを書くことによって乏しい才能も開かれていく」という、ご意見には深く納得し励まされました。この言葉を胸に刻んでこれからも精進して参りたいと思います。

河林満賞 「鴉」

紺野夏子



紺野夏子

こんの なつこ
1949 佐賀県佐賀市生まれ
九州大学医学部付属看護学校卒
現在は福岡県福岡市に在住
「百日の記」で中上紀賞受賞
同人誌「南風」編集人

河林満賞の移設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品はこれまで銀華文学賞に応募される小説作品を対象にしてきましたが、銀華文学賞の一時中断以後まほろば賞のなかに移されることになりました。同人雑誌の優秀な作品に贈賞され、受賞者には賞状、記念品、賞金十万円が授与されます。(二〇二二年改訂)

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」／文芸思潮



※まほろば賞は文学を愛好する皆様からの御寄付によって成り立っております。皆様の御支援を切にお願いするしだいです。106

読者賞 受賞の言葉 天野いずみ

書いていてふと疑問に思うのは、同人雑誌に載った自分の作品が、同人や友人以外に読まれているのだろうかということ。今回、全国同人雑誌評に取り上げていただき、その上「読者賞」までいただけると聞き、選考委員の方々はじめ、全国の『文芸思潮』読者の皆様に読んでもらえたことがわかりました。手応えのある、これほどうれしいことはありません。今後もっと言葉を磨き、その言葉が人々の元に届くよう、さらに精進して参ります。この度はありがとうございました。

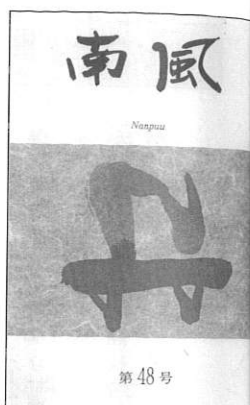
読者賞

「夢で逢いましょう」

天野いずみ



あまの いずみ
1953 富山県高岡市生まれ
77 立教大学理学部卒業
2010 文芸同人誌「朝」に入会
現在に至る 東京都杉並区在住



読者賞について 読者から持ち点制の感想投票をいただき、その合計点数の最高点の作品に読者賞を贈ります。今回は投票金合計金額は66000円となりました。これを得票に従って配分し、各著者に贈らせていただきます。全国同人雑誌振興会



●読者賞への御投票と賞金をお送り下さり、まことにありがとうございました。読者賞は下のよう
な結果となりましたので、ここに詳細をご報告させていただきます。

投票者	村上君と 優のこと	鴉	サイクロイド	水水母	『よもつ耶』 ～更待月のこと	夢で逢い ましょう	光復香港
木内是壽					100		
今田真理子	9	9					
山田真己乃					10		10
渡辺恵理						50	
西田宏明			10				50
和田信子		50					
夏目由美				27		80	
外山寛子	20						
宮脇永子		30					
渡辺 聡						120	
志村 謙						10	20
寒河江仁			10			19	
山田まさ子	1	15		3		1	
木村弥一		16					
計	30	120	20	30	110	280	80

各作品寸評

●「よもつ耶…」は、独特な感性が光っています。「光復香港」は二二六Pに書かれている「僕らの頭は民族自決と独立を掲げることが正義で……」という文に、当時のことに疎い私は「そうだったのか！」と頭を打たれた気持ちになりました。
(山田真己乃)

●海邦氏の「よもつ耶…」は男の人生を語る細かい描写のうまさ引き込まれた。(木内是壽)

●「村上君と優のこと」はさわやかな気持ちになれてよかった。「鴉」は人生の終末が象徴的に書かれていて、胸に残る。どれもみんなよかった。
(今田真理子)

●「夢で逢いましょう」は、わかりやすい文章で一見平明だが、よく鍛えられた極上の文章で、何度でも読み返せる光沢がある。さりげない、自然な日常の中に胸に残るものがある。(渡辺聡)

●「光復香港」は全共闘世代の、残すべき記録。現在もアジアで渦巻く民主化運動と共鳴するものがある。胸に響いてきた。
(西田宏明)

●「夢で逢いましょう」には、懐かしさがある。初恋の中に滑り込んでくる死が、人生の儚さを浮かび上がらせて、高校時代のかけがえのない何か、煌めきをもって戻ってくる。(渡辺恵理)

作品感想 二〇二二年まほろば賞読者賞はこう投票した

●よい作品が多く、投票に苦勞した。

まず「光復香港」は0点とした。これは全く読者賞にふさわしくない。圧倒的実力を持ち、まほろば賞に必ずや輝く作品だからである。斬新な着眼点があること、現代性、この点において「光復香港」これをおいて他にまほろば賞があるだろうか。

香港のデモとともに、かつての日本での学生運動の頃のデモが語られる。

中国の共産党に信頼を寄せていたことが少しだけ語られているが、こんな数行を読むと私たちの世代はそんな先輩たちを知っているのが胸が痛い。中国の共産党は違う、その熱心な信じきった言葉を今でも思い出す。そういう思い出に触れてくる作品である。主人公と同じく留置場に入れられた先輩方を思い出した。あと、作中の刑事さん、太い万年筆を持っているのが印象的だった。今は取り調べはボールペンである。叩き上げの刑事さんから見るとデモをする学生さんは理想的すぎて敵意を持ったと語られている。読みながら、刑事の節くれだつた指と万年筆が眼に浮かぶような気がした。「光復香港」と隣のページに自分の作品が並んだりしたら、きつと霞んでしまう。

「鴉」——次にまほろば賞の本賞に近い位置にいるのは「鴉」である。かつて自分を捨てた父親、機能不全家族とともに老いや介護の問題が横たわっている。これも今日的な

テーマといえよう。

紺野氏は文章力のある上手い人で、最後のシーン、カラスが鮮烈なイメージを残している。私はこの作品は非常に勉強させて頂いた。短編小説はかくあるべしというような典型的な作品である。「光復香港」がなければ一位になれたと思う。「よもつ耶」更待月のこと——これは幻想的なオムニバス作品で、銀河鉄道を思い出した。作者は鉄道の好きな人のようだ。詩的なので好き嫌いが分かれる作品だと思っ

「サイクロイド」——教養人としての作者の立ち位置が透けて見える。技術的には「」が多いのが気になる。

またわたしは自分が障害手帳2級のせいとか、障害者がテーマとなる作品には逆に辛めになるということもある。なぜ円環にしなければならぬのか、生きることを美しく円にするのか、なぜ？ ギザギザじゃダメなのか。

しかし一方では障害者家族の問題提起をしたということでは採点を高くする人もいるであろうと思う。哲学的な点で好む人がいてもおかしくない。

「水水母」——惜しいところのある作品である。古い手紙に綴られた、高校時代から続く人間関係に嫉妬するという話である。

女の情念をとらえた作品は今回の応募の中ではこの作品だけである。私は女の情念が描かれた作品が好きなので大変に好みなのだが、そして作者はわが故郷の高知女子大学卒業、採点を高くつきたいと思う。

ただ惜しむらくはラストシーンである。なぜ別れた夫に、

全国同人雑誌最優秀賞 同人雑誌大賞

賞金30万円



同人雑誌大賞
新設30万円
まほろば賞
賞金アップ30万円

乞御期待
第5回
全国同人雑誌会議
全国同人雑誌大賞
授賞式

今からでも遅くはないなどと思うのか。元夫と心ゆくまでな
ぜ話したいのか。高校時代の同級生の女をいつまでも引き
ずっているような男ではないか。そんな男とつとと忘れなさ
い。そうヒロインにアドバイスしたくなる。
ずるずると断ち切れない人間の思いの象徴として水水母が
登場する。絵里子が自分の人生を生きたるためには、水クラゲ
を包丁で突き刺すべきではないか。
未練な、しかしこんな女もまだいることは確かだ。要領の悪
い妹のような絵里子への励ましを込めてのポイントとしたい。
「夢で逢いましょう」——懐かしい青春の香りのする作品で
ある。淡い初恋に近いような男の子との想い出に好感が持て
る。男の子の膝のところはよく描けていると思う。星空の
シーンも良い。
細かい点では、最初のシーンに夢の後、ヒロインの下着を
濡れていたとしたほうが良いと思う。より官能的な気がす
る。ただこの男の子との関係を大変に淡くしたいというので
あれば下着が濡れていない現在の形の方が正解となる。でも
湿っていたとしてもした方が、微妙な感じが出るのではない
か。こういうシーンは作者の体験とは無関係に、作品全体に
どう響くかを考えてほしい。
「村上くと優のこと」——良い作品だが、冒頭の方でつま
ずいた。気になったのは6行目、光をまとった白い少年とい
う言いまわし。一瞬SF小説かと思つて読み直してしまつ
た。すぐにこの少年がロシアの少年で金髪の子だということ

がわかるのだが、6行目でこの「光をまとった」と出てくる
と、読者は混乱する。光というのはやや宗教的にも取れる表
現であるから、何か他の表現にしたほうがよかつたと思う。
もちろん同じ表現でも途中に出てくるのは構わない。最初の
方なので驚いたというだけに過ぎないのだから。他の所には
全く問題はなく、うまい人だと思ふ。全体にパステル画のよ
うな印象を抱かせる。
人種問題も、はじめの問題も、こういう風に甘やかには解
決しないと思う。人の良い学生に理解力のある先生、この物
語の設定は多分夢に過ぎない。でもそんな夢も見えていいら
う。作品が全てリアルでなければならぬという事はないと
思うので、ポイントを入れることにした。
ノーマン・ロックウエルの絵のように夢を語ってもいい、
そう読んだ。
七作品の彩りゆたかに
猛暑に耐えかね、カフェにこもつて文芸思潮に読みふけつ
た。七作の彩り弁当を食べたような気分だ。
一作ごとに作品に話しかけるようにして読んでいく。この
一行が気に入らないとハラを立てたり、逆に胸に染みて涙ぐ
んだり。まさに泣いたり笑つたり時間の時間を過ごさせてもらつた。
来年もまほろば読者賞に参加したい。応募作タイトルに重
ねて申し上げる。花束みたいな作品たち、文芸思潮で会いま
しょう。
(山田まさ子)

村上君と優のこと

若栗清子

五月の午後、その日は仕事が休みだったので遅いお昼を食べたあと、ソファに横になって、うつらうつらしていた。

突然玄関のドアが開き、いくつかの不揃いな足音が聞こえた。あ、と思う間もなく息子の優ゆうともう一人、光をまとった白い少年が、リビングに入ってきた。あわてて半身を起こし「お帰り」と声を掛けた。しかし優は振り向きもしないで、リビングの向こうにある自分の部屋へと姿を消した。ただ連れの少年だけがドアを半開きにして顔をのぞかせ、こんにちは、と小さな声で答えた。

優が友達を連れて来るなんて珍しいことだった。少し驚きながら、おやつ用に買っておいたシュークリームを二個、それと麦茶をお盆に乗せ、ドアをノックした。

びている。どこか遠くの、知らない国から来た少年であることは間違いないかった。しかし、ずっと見つめ続けることはできない。

「ここに置くから」机の上にお盆を乗せ、部屋を出ようとした。その時、私の背中に少年の、ありがとうございます、という、きちんとした返事が届いた。

次の日も、優はその少年を伴って帰ってきたらしい。らしい、というのは私の帰宅が七時を過ぎていて知りようがなかったからだ。

流し台のプラスチック容器に、お茶碗が二つ沈めてあった。「ご飯食べた？」私が尋ねると、「うん、腹が減っていた」優が答える。「おかずはどうしたの」「ビン詰めの海苔」いくら空腹でも優はこんな食べ方をしない。「そんなにおなかがいっていたの？」「僕じゃなくてあっち」「あっち？」「村上も一緒だった」村上……「昨日会っただろ」なるほど。ひとまずあの少年の名前はわかった。

「同じクラスなの。転校生？」

「うん、ウラジオストクから転校してきた」ウラジオストク……ロシアから転校。優はあたかも隣町から引越してきたかのような口ぶりで言った。一方、私は、あの少年が遠い地から瞬間移動してきたように感じ、頭が一瞬ぼうつとした。

二人はすでにゲームに夢中だった。優はベッドの上であぐらをかいてうつむき加減で、せわしなく指を動かしている。部屋の片隅には放り投げられたランドセルが転がっている。かぶせ蓋が内側を見せて伸び、ペンケースや教科書、ノートが飛び出している。机、本棚、ベッドがある六畳の普通の部屋。カーテンが開けられていて、窓から太陽の光が入り、家具たちが輪郭を鮮明にしている。埃が舞っているのまで見える。

さつき私の目の前を通り過ぎて行った少年はカーペットに座り、ベッドを背にして、スマホの画面に集中している。私の目はその少年に吸い寄せられた。白い横顔、金色というより白金に近い髪、ジーパンの布地を余らせている細い足、半袖のシャツからは白いアスパラガスのような腕が伸

私は真実まことフラワースクールという花の会社に勤めている。この会社は、生け花やフラワーアレンジメントの教室を持ち、イベントやパーティーを彩る花の注文も請け負っている。二年前、夫と離婚してから路頭に迷うことなく何とかがあるのも、この職場のおかげだった。短大時代に取得した華道の免許が思いのほかに役に立った。それでも花の扱いや管理、教室の掃除はもちろん、社長である真実先生のスケジュール調整からお弁当作りまで何でもこなした。夢中で働くうちにパートから正社員になった。それは自分で初めて獲得した、社会における私の立ち位置だった。

離婚前後の怒涛の時期を過ぎ、いざ優と二人きりになると、何とも言えない気まずさを覚えた。優は少年期特有の変化の時期にさしかかっていた。口数が少なくなり、喉にはガムでもあるかのように言葉や声をせきとめていた。鋭さを増した視線は、残酷なほど対象物を査定した。でもすべてを変声期のせいにはできない。優先順位など付けられないが、必死だけを比較すれば優が後回しになることもあったのかもしれない。

2DKのささやかなマンションで、私たちはそろそろと実験でもするかのよう暮らしていた。

優が五年生の冬のある日、事件が起きた。私は夕食の準備をしていた。乱暴にドアを開け、帰ってきた優は、ランドセルを床に叩きつけた。あまりの騒々しさに私は玉ねぎ

の皮を剥く手を止め振り返った。

「もうこの服、嫌だ！」激しい怒りの声で吐き捨てたあと、優はランドセルの中から道具セットを取り出した。そして迷いのない手で工作用のハサミを選ぶと、それを自分の体に向けて突き立てた。

私はきやあ、と声でない声で叫びながら、優に駆け寄り、ハサミをもぎ取った。それを遠くへ放り投げ、暴れる優にぶつかるときに体重をかけた。勢い余って二人とも床に倒れた。優は私の下で抗ったが、死んでも放すものかという私の全力の方が勝っていた。やがて優の抵抗は治まり、代わりに小刻みな震えが伝わってきた。私は違う不安に襲われてこわごわ体を離した。

「大丈夫？ ケガはないわね」

お腹のところが裂けたセーターから白い下着が見えた。急いでセーターを脱がす。半袖のシャツは無傷で目に痛いほど白かった。

さらにシャツを脱がし、優の体のそこかしこを点検するように撫でさすった。

優の体には何も起きていなかった。安堵とともに急速に力が抜けていった。

その際に優は私の両腕から逃れて立ち上がった。両こぶしで空気を殴りつけている。

「毎日同じ服を着ている。汚いって、女子が」

するべきことは決まっていた。六時、今日の勤務が早番でよかった。まだデパートの閉店まで一時間以上ある。

「わかった。母さんだつてやるときはやる。一緒に来なさい」

私は強い声で命令した。私の顔は鬼の形相だったと思う。優の怯えた表情でそれがわかった。急いで優に服を着せ、手をむんずと掴んで車に向かった。どこへ行くかとも聞かず優はおとなしく助手席に座った。

車を飛ばし、駐車場に入れると、デパートに駆け込んだ。館内にあるATMで十万円を下ろし、子供服売り場に直行した。

ナイキ、マクレガー、ラルフローレン、知っている限りのブランドのトレーナー、ブルズンを優の体に当ててみたり、試着させたりした。

「少し大きめのものを選ばれた方がよろしいかと」店員が助言してきたが、私は首を横に振った。来年も着回せるサイズの服など要らない。今が大事なのだ。今、優が誇らしく胸を張り、周りを納得させることが必要なのだ。すぐブランドを特定できる、ロゴが大きく目立つ服を何点か買った。パーゲンではなく正規の値段で買うことは初めてだった。十万円という金額はとても平常心でいられる金額ではなかった。でも猛々しい高揚感に駆り立てられていた。

「こんなを買って大丈夫？」さすがに優は心配そうな顔を

叫ぶように言葉を繋いだ。

「服がダサイ、キモイって」

優は泣きながら繰り返した。

頬を打たれたような気がした。何が起きてこうなったのか、優はどうやって家までたどり着いたのか。わかってくるにつれ、優が受けた痛みがしんと胸に迫った。

「ごめん。お母さんが悪かった」

私は再び裸の優に飛びついた。愛おしくて悲しくて、あらん限りの力を集めて抱きしめた。怒りや後悔、自責の思い、刻々と湧き出る感情ごと抱きしめた。

成長期だというもつともらしい理由をつけて、濃紺と緑の二枚のセーターを代わる代わるに着せていた。何度も洗ったので色が褪せて毛玉も多く付いている。小五の冬をそれで凌ぐつもりだった。毎日洗った服を身に着けさせていたが、そんな小細工は五年生の女子には通用しない。汚い、それは、爆弾のような一撃だった。私たちの暮らしを、私の生き方を一瞬で打ちのめした。

私の腕の中で優の体が荒い呼吸と共に動いている。骨格はガラスでできているのかと思うほど細く頼りなかった。

かすかに鼻腔に届く匂いには、また子供らしさが残っていた。嗚咽している優の頭や体を撫でながら、なによりも彼の体が無傷だったことに感謝した。今、両腕の中の肉体以上に確実なものは、この世にはないのだと思った。

したが、「お母さんだつて、へそくりくらいあるのよ」と胸を叩いて見せた。

私は深く心に刻んだ。ほんのわずかの変化も見逃さずにいよう。彼の表情、目の動き、声の調子、私の傍らを通り過ぎる時の、彼の起こす小さな風までも掴まえるのだと思った。

そんな綱渡りのような日々を過ぎ、優は六年生になった。優はほぼ毎日村上君を伴って帰って来ていた。二時間ほど優の部屋でゲームをして過ごす。五時になると「お邪魔しました」と頭を下げて帰って行く。

部屋で二人は、それぞれのゲームに興じていた。おっ、しまった、とかやった、とかゲームの成り行きで発せられる短い言葉だけが飛び交う。これで一緒にいる意味があるの、と首を傾げたくなるが、何となく通じ合っていて問題ないのだろう。

ある日、たまたまお菓子を切らしていた。考えた挙げ句、おにぎりでもいいかな？ 優に聞くと、「そっちの方がいいかも。喜ぶよ」と、笑顔で答えた。

海苔を巻いたおにぎりにゆで卵を添えて、部屋に持って行くと、村上君は目を大きくして、ヤバイと言った。金色のまつ毛に縁どられた青い目。澄み切った青い目はバイカル湖のようだと思った。もちろん本物のバイカル湖は見ることがないけれど。

完璧なロシア人の風貌と完璧な日本語、お手本にしたいほどの行儀のよさ。気を使いすぎかと思えるほどの立ち振る舞い。自然に彼の背景へと興味は誘われていく。お母さんはいくつ？ お父さんは日本人？ どこにお勤め？

「村上君、下の名前ってどんなの？」

その時、バイカル湖の青い目が一瞬翳った。

「関係ないだろ」優は空気を悟り、ささぎったが、村上君は晴れやかな顔を上げた。

「ミハイル。片仮名でミハイル」

彼は一音一音区切って答えた。片仮名で、とあえて注釈をつけたところに彼の特別の思いを感じた。聞くべきではなかった。彼の秘密を暴いてしまったような苦い思いが広がった。私の喉にこそダムが必要だった。無遠慮な質問をせき止めるダムが。

私の仕事が早番で、夕飯も早く出来上がった時、「村上君、おやつじゃなくて御飯、食べていく？」と、聞いた。

彼は少し頬を赤らめ、うつむいた。

「あ、ごめん。お母さん、待っておられるよね」

「聞けばいいじゃん」優が促して、村上君はスマホを手にとった。村上君はロシア語でしばらく話をし、嬉しそうに両手で大きな丸を作った。

「お父さんは東京に出張です。お母さんはOKと言いまし

た」

それから時々、村上君は家で晩御飯を食べるようになった。一度、村上君は「お母さんが作ってくれました」と言っていてキッチンペーパーに包まれた手作りのピロシキを持ってきてくれた。さすが本場のピロシキは私たちの知っているそれとは少し異なっていて、見知らぬ遠い国の味がした。

「美味しかったわ。ありがとう。こんどレシビを聞こうかな」

村上君は、はい、と弾んだ声で言った。

「あ、お母さんのお名前は？」続けて聞いた。

彼は「村上」と、言いかけて「えっとユリア、です」と答えた。

「ユリアさん、素敵なお名前ね」

うなずきながら反芻すると、村上君は輝くような笑顔になった。

お米はいつも、三合炊いた。村上君につられて優もよく食べるようになった。千切りキャベツもキュウリの浅漬けもプロッコリーも何でも食べた。私は自分の息子がこんなにも野菜好きだということを知らなかった。

村上君は肉じゃがも、鮭の切り身も、急いで揚げた形のいびつなコロッケも好き嫌いなく食べてくれた。箸使いも鮮やかだった。迷い箸や重ね箸などを一切しない。箸は美

しい軌跡を描く。おかずやご飯、汁物などをバランスよく食べる。ゴクゴク、カリカリ、パクパク、ツルツル。あらゆる擬声語と擬態語が飛び交った。とはいっても会話らしい会話は少ない。小さなリビングに村上君の金色の頭があるだけで景色がなごんだ。特別なご馳走も特別な話題もなかったが、心安らく豊かな食卓だった。

いつも村上君の日本語の正確さに驚く。

「まずロシア語で言いたいことが浮かぶんだって。それから素早く日本語に変える。少し返事が遅れるだろ。頭の中の変換作業に時間がかかる」

なるほど。複雑な工程を経て彼の日本語は紡がれる。

今ここで仲よく晩御飯を食べているロシアの少年は、村上君という名前で、優の友達だということ。それがすべてだということであらためて自分に言い聞かせた。

粉雪の舞う寒い夕方、スーパーで買い物をしている村上君と外国人らしい女性を見かけた。お母さんに違いない。四十歳くらいだろうか。彼女は疲れた表情をして、けだるさをまとっていた。白い肌にはそばかすが浮いて、麦わらのように乾いた金色の髪を後ろで一つに束ねていた。この寒空に薄いワンピースとフリースのジャケットだけの服装だった。

お腹あたりは明らかに膨らんでいて、それも臨月に近い

ことをうかがわせていた。元々きれいな人なのだろう。でも何か痛々しい感じがした。

村上君が押すワゴンに緩慢な動きで食品を入れている。特別見つけていたわけではないが、村上君と目が合ってしまった。彼はきまりが悪そうな顔を一瞬したのち、小さくお辞儀をした。そこで初めて二人を先に見つけた私が、名乗らないのは失礼だと思った。私は女性に聞こえるように大きめの声で、こんにちは、と言った。村上君は素早く反応した。母親の腕をつつき何か彼女に告げた。女性はぼつとこちらを見た。さらに彼は早口で何か説明した。全くわからなかったが、山中君という言葉だけは聞き取れた。

私はとっさに「ピロシキ、美味しかったです」何週間前かのお礼をあわてて言った。すぐさま村上君が通訳をする。すると彼女は顔いっぱい笑顔で私に向けた。さつきまでの憂愁はぬぐわれていた。私もつられて笑みを返した。しかしその後が続かなかった。ロシア語はおろか英語一つも浮かなくてこない。もどかしさに焦った。何とも表現できない間が空いた。彼女も村上君も言葉に詰まっている。話の接ぎ穂を見つけない必要なのは私のはずだった。でもできなかった。耐え切れず私は意味もなく頭を下げ愛想笑いをし、レジに向かった。情けなかった。そこで初めてはた、と気付いた。せめてユリアさん、と名前で呼ばよかったです。そうすれば何かが小さくほぐれたかもしれなかった。

三月になり卒業式を迎えた。かしこまった雰囲気の中、二クラス分の黒い頭が並んでいる。後方に一人、金色の頭があった、村上君はやはり目立つ。幼児の喃語なんごのような声があった。保護者席を見渡す。ブランケットでくるんだ赤ちゃんを膝に乗せている女性が、前方に座っている。以前スーパーマーケットで見かけた村上君のお母さんだ。薄い金色の髪はアップに結われて白い花が飾ってある。

後ろからひそひそ声が聞こえた。

村上君は連れ子なんですよ。日本人の旦那さん、十歳下ですって。えーほんとに。また子供が生まれて大変ね。すごいわね。ちよつと聞こえるわよ。声大きい。大丈夫、大丈夫。あの奥さん、日本語ダメらしいから。

私自身、村上君に直接聞くことは強く戒めていたけれど、彼や家族について勝手に推理や詮索しなかったとは言えない。それなのにいざ二人が口の端に上っている場面に会おうと、いたたまれない思いがするのはなぜなのか。矛盾しているのはわかっている。でも村上君や家族を人の目や噂話から守りたいという気持ちも本当のことだった。

よく見ると彼女の右隣の椅子が空いている。私は意を決して後ろから「ユリアさん」と声を掛けた。彼女は振り向き、私を認めると安堵したような表情を浮かべた。その瞬間、ひそひそ声は止んで、何人かは肩をすくめ私を見た。

も確かにすごく背が伸びた。私たちはお互いの子供でその成長を知るといふ思いを共有した。

一日一日、時が流れている。優も村上君もいつまでも同じ場所にはいない。声が変わり、背が伸び、気持ちだつて変わっていく。

中学に入学して一週間は、徐行運転をしながら穏やかに過ぎた。優が制服に着られている感も、斜めに掛けている白いカバンも、ズボンのすそが余ってスニーカーに乗っかっていられるさまも、すべてが真新しい一年生を証明していた。

朝、優を送り出す時、マンションの玄関までついていく。学生服の黒い背中が洋菓子店の角を曲がるまで見届ける。私の新しい慣わしとなった。優は決して振り返らない。でも角を曲るとき軽く左手を挙げる。それが行ってきます、の合図だった。

優と村上君は違う組になった。三つの小学校を束ねる中学校は、一学年が五組もあり、優も村上君も大きな海に放たれた小魚のようなものだった。優はバドミントン、村上君はバスケットボール部と違う部に所属して、放課後の過ごし方も別々になった。当然だが村上君は家にも来なくなった。優の口から村上君の話が出ることはなく、私も特に尋ねたりしなかった。学校で二人は、どういう距離感

ひるんではいけないと思った。少し距離があったけれど、かまわず私は幾列かをすり抜けて彼女の隣に座った。そしておくるみに包まれた赤ちゃんの顔を覗き込んだ。乳児は飛行機の絵が描かれた青いベビー服を着ていた。小さな手を開いたり握ったりして、機嫌がよさそうだった。ふつくらした頬はつきたての餅のようだ。ずつと前、優が赤ちゃんだった頃のいろいろが思い出され、自然に笑みがこぼれる。もうこの際、日本語でいい。通じなくてもいいと思った。

「赤ちゃん、かわいいですね。坊ちゃんですね。何か月ですか」

私は指で二と三を表した。ユリアさんは納得したふうで小さく二本の指を立てた。

「村上君にそっくり」思わずそう言った。これは決して嘘ではなかった。ふわふわした髪は茶色で、眩しそうに細めた目もバイカル湖の青ではなかった。でも目鼻立ちや白い肌感じが村上君と似ていた。自然に出た言葉だった。ユリアさんは一瞬目を大きくして「ダー」と言い白い歯を見せた。そうこうしているうちに卒業生起立、と号令が掛り、六年生全員が立ち上がった。その声で私たちは視線を前に向けた。村上君と優は最後列に並んでいる。

私は手を高くして「村上君、大きくなりましたね」と、身振りで伝えた。「山中君、大きい」ユリアさんも右手を頭の上に掲げた。私たちは顔を見合わせて笑った。二人とどんなふうにも過ごしているのか私には知りようがなかった。あれほど濃密に私たちの毎日に存在していた村上君が、ぼつかりといなくなった。

車で注文先に花を届ける仕事の途中、交差点で信号待ちをしていた。右折する側にあるコンビニの前で、しゃがむ一人の少年を見た。金色の頭で黒い学生服。あ、村上君とすぐに気が付いた。一メートルほど離れた自転車置き場に、同じ学生服姿の男子生徒がいた。優だった。二人とも飲み物を手に持っている。

優は自転車にもたれかかるようにして立ち、村上君はぼんやりと交差点に目をやっていた。一見無関係に見えるその距離に特別な何かを感じた。話をしている様子もない。視線を交わしているふうでもない。だけど一緒にいるという感じが伝わってきた。信号が変わるまでの短い時間の出来事だった。ただそれだけのことなだけで、大切な場面を見た思いだった。それは私の心の中に、一枚の写真のようになされた。

少しずつ加速しながら四月は何事もなく過ぎていった。決まった時間に優は学校に行き、私は仕事に行く。お互いに一日の務めを終え、一緒に夕食を摂り、それぞれの部屋で眠る。時間の流れに沿った、当たり前の作業の繰り返し。が毎日を作っていく。

しかし五月、突然、優が髪の色を変えた。

昨夜、風呂場からシャワーの音が響いていた。雨音のようにも聞こえ、耳をそばだてた。風呂桶の鳴る音、お湯を出すたびに着火するガスの音。一時間を超す長風呂の後、パジャマ代わりのTシャツとジャージのズボン姿で優は風呂場から出てきた。頭にはなぜかバスタオルをターバンのように巻き付けて、速攻で自分の部屋に逃げた。洗面所のごみ箱には二重に封がされたビニール袋が捨てられていて、ヘアダイの箱が薄く透けて見えた。中を調べたい思いに駆られたが、かろうじてやめた。胸が妙にざわついていた。翌日、うつむき加減でリビングに現れた優の髪が金色に変わっていた。

「どうしたの。その髪」

問わずにはいられなかった。

「いいだろ。単に心境の変化」

優は平然と答え、次に少し厳しい顔をした。

「あいつ、何人かから北方領土を返せって言われている」

唐突に放ったその言葉。あいつ、北方領土。そして金色になった髪。頭の中で何かが、つながった。

「もしかして村上君、いじめられているの?」

優は表情を変えず、軽く首を横に振った。

「ふざけているだけだと思っけど、許せん」

優の目には強い意志があった。優の金髪は村上君と何か関係があるのか。でもどんな意味があるのだろうか。

時間が限られた朝の食卓で、これ以上聞くには重すぎる話題だった。優はトースト二枚と目玉焼きを食べ、七時半きっかりに家を出ていった。本当にいつもと変わらない朝だった。金色の髪以外は。

さすがに平静ではいられなくなった。優の部屋を掃除する時、六畳の部屋をくまなく見回した。本棚、ベッドの下、クローゼットはもちろん、ゴミ箱の中身まで調べた。特別変わったことはない。そして机の引き出しを開けた。誘惑に駆られた。だがしっかり鍵が掛っていた。優に直接聞けばいいだけの話だ。裏でこそ探っている自分が浅ましくていやだった。

さらに六日後、再び大きな変化が起きた。

「ヘアダイがなかったつけ、黒の。白髪染めに使っていただろ」

「どうするの」

「ちょっと貸して。黒に戻すんだ」

洗面所の引き出しの中から、生え際までむらなく染まります」と大書された私の白髪染めを奪っていった。

再び一時間を超す長いお風呂の後、現れた優の頭は墨汁に浸したように真っ黒になっていた。さすがに聞いた。

「先生に何か言われたの」

「違う。必要がなくなった」

「必要? どういうこと」

ら口火を切った。

「学校ではどんな様子でしょうか。最近ちょっと気になることが……私は仕事が忙しくあまりかまってやれなくて」

「山中君は皆と仲良く、澁刺とすごしています、特別問題なことはありません。ただ……」

先生は穏やかな表情を一瞬曇らせた。

「もちろんお気づきのこととは思いますが、頭髮のことで少しお話があります」

やはり来たかと思った。

森先生は丁寧な言葉を選んで私に問うた。

「山中君の髪が金色になった件について、何かお心当たりがありますか」

「いいえ、特には。本人は心境の変化だと言っております」

そうですか、と先生は頷いた後、静かに告げた。

「先に村上君が黒髪になりました」

「え?」

「村上君がクラスの生徒から不適切なことを言われたと聞きました。そのせいかどうかはわかりません。担任の佐伯先生は双方を呼んで、話をされたそうです」

不適切なこと。優が口にした北方領土云々のことか。

「それから二日後でした。山中君が金髪になった……偶然ではないですね」

「てかき、変だったから」
優はあっけらかんと答えた。
これはすんなりと納得できた。黒い眉、黒い目に金色の髪は確かに変だった。今時、金髪どころか緑や赤い髪の若い子はたくさんいる。でも優が金髪になると、異様な生き物を見るような違和感があった。
短期間で二度も変わった髪の色。きつと深い訳があるのに違いない。しかし聞えない雰囲気があった。ただ見守るしかなかった。

黒髪に戻ったものの、私の気持ちは行ったり来たりを繰り返していた。私にはいわゆるママ友と言える友人がいなかった。同じ年ごろの男子を持つ母親の悩みを誰にも打ち明けられない。でもそんな悠長なことを言っている場合ではないことも分かっていた。何が起きているのか知るべきだ。もしかしたら学校から呼び出しが来るかもしれない。

呼び出される前にこっちから出向こうとも考えた。
そこではっと気が付いた。もうすぐ初めての個人懇談会がある。まさに絶妙のタイミングだった。

当日、個人面談に合わせて午後の仕事を休んだ。教室の前で二度、深呼吸をして扉を開けた。

初めて会う担任の森先生は五十歳くらいの女性で、眼鏡の奥の目は柔和な光を湛えていた。息子がいつもお世話になっております、通り一遍の挨拶をして椅子に座り、私か

少し念を押しつつ、同意を求めるといふ口調だった。あらためて私は優の金髪は、村上君への援護射撃の意味があったのだと思った。

「お聞きしますが、山中君と村上君は同じ小学校ですよね。親しかったのですか」

「はい、六年生のころ、村上君は毎日のように家に遊びに来ていました。いえ、遊ぶといってもゲームをしているだけですが」

「それは十分に、遊んでいるといえます」

先生の真顔にふっと笑いそうになった。

「中学に入ってからパタリと彼は来なくなりまして。クラスも部活も違いますし。もっとも見えないところで連絡を取っているかどうか、そこまでは、わかりません」

コンビニの前で二人を見かけたことは言わなかった。お互いの抱える事情は重なり合うはずもないけれど、それでも二人は何となく一緒にいたのではないかと思う。

「そうですか。学校でも二人が特別親しいようには見えません。いえ、孤立しているわけではなく、それぞれ友人がいる感じですよ」

森先生は椅子に座り直して、声を低くした。

「担任の先生からお聞きしたのです。こんなことは言うべきではないと思いますが」

言ったのち、さらに声をひそめた。

それがさざ波のように全体に広がりました」

そこまで言って先生はあわてて付け加えた。

「いえ決して二人を傷つける笑いではなく、包むような温かい笑いでした」

それから先生は真剣な顔になり、

「二人とも何かあったのではないのでしょうか」と、私の目を覗き込むように見つめた。

「次の日でした。村上君が金髪に、山中君が黒髪に戻りました」

そういうことだったのか。現場にいなかった私にも状況が想像できた。いままでの疑問が一気に解けていった。張り詰めていたものがほぐれて私は深い息をついた。

「はつきりと説明はできないのですが、この件は解決したと感じました」

私も同じ思いだった。黒髪に戻した時の優のすがすがしい顔を思い出す。

森先生が担任でよかった。生徒たちの気持ちをしつかりつかめる人でよかった。前途に明るい光が射してきた気がして、胸が熱くなった。

体育大会が近づいてきた。学校では目玉競技の一つである、学年別の騎馬戦の練習に熱が入っているようだった。珍しく優はいろいろ説明してくれた。自分は青団で騎馬の

「村上君には弟ができたのです。今のお父さんの子供です。弟さんの名前は陽介というのだそうです。髪も目も黒に近い茶色で」

一気に腑に落ちた。忘れていたわけではない。でも村上君は村上君で「ミハイル」という名前をことさらに思い出すことはなかった。彼の、名前の重さを今まさに噛みしめる。

「いろんなことが彼を刺激したんでしょう。でも村上君の黒髪と山中君の金髪についてはさすがに職員会議で議題に上りました。厳しい意見も出しましたが、私は一週間待ってくださいとお願いました」

「一週間ですか」私は鸚鵡返しに尋ねた。

「いえ何の根拠もなかったんです。ただ様子を見たいと思えました」

私がびくびくと過ぎた何日かの裏側に、こういう経緯があったのだ。

「そんな折、体育大会に向けての合同練習がありました。全員が混じって赤、白、青、黄の四つの団に別れました。その際、初めて村上君と山中君はお互いの顔を見合わせました。近くにいた生徒が言うには、似合わねえ」と言って吹き出したそうです」

その情景を思い出したのか、先生は笑いをこらえた。

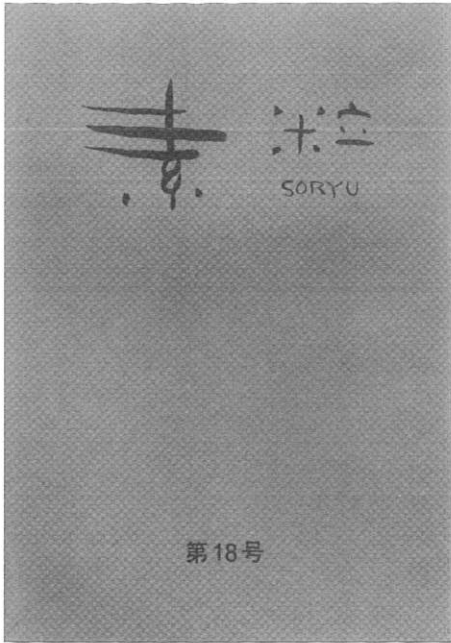
「黒い髪の村上君と金色の髪の山中君。二人ともお腹を抱えて笑いました。つられてあちこちから笑い声が聞こえ、

土台を組む。村上君は黄団で、上背があるから騎手に選ばれたそうだ。

体育大会当日、日曜日のせいかグラウンドには大勢の保護者やOBが詰めかけていた。私は小さな折り畳み椅子を持って前の方に場所を取ることができた。ほっとしたのもつかの間、黄団の応援席に目をやった。ユリアさんを探して目を凝らした。庇で覆われた父兄席の端のところ、ぎりぎりはみ出すようにしてユリアさんはいた。ベビーカーには陽介君が乗っているのだろう。そばには大きな日傘をさした背の高い男の人が立っている。傘をベビーカー側に傾けて日陰を作っている。ご主人なのだと思った。なんだかとても安心した。ユリアさんはご主人から騎馬戦がどんな競技か説明してもらえらるだろう。騎手になることが男子にとってどんなに誇らしいことか教えてもらえらるだろう。勝負はわからない。でも勝つても負けても村上君の姿を二人に見届けてほしいと思った。

徒競走や玉入れ、綱引きと、プログラムは進み、午前中の一番の山場である騎馬戦がいよいよ始まった。

グラウンドの中央に土俵のような円が描かれ、二つの団が一騎打ちで闘う。始めは優が騎馬を組む青団と白団の闘いだ。ホイッスルが響き渡る。一戦ごとに歓声と応援の太鼓が重なり、いやがおうにも興奮が高まる。この対戦は青団が勝利した。次は村上君が騎手を務める黄団と赤団の番



わかくり きよこ
 1953 富山市生まれ
 慶応義塾大学文学部国文科卒業
 思潮社出版の詩集『華道クラブ』にて「中日詩賞新人賞」を受賞
 第13回とやま文学賞（詩部門）受賞
 第29回とやま文学賞（小説部門）受賞
 同人誌「素粒」所属

だ。黄団が勝てば、青団と優勝決定戦になる。闘いの旗が振られた。一戦目は黄団の勝利。二戦目は赤団の粘り勝ち。最後に控える村上君の騎馬は腰を落として待機している。赤団の二番手は俊敏な動きであれよあれよという間に黄団の五騎を倒してしまった。黄団は崖っぷちに追い詰められた。残すのは六騎目の村上君の騎馬のみだ。闘いの合間のわずかな静けさ。海の水が凧いだよな、でも張り詰めたひとときに、待機している青団の中から一人、すっと立ち上がる生徒がいた。彼は円の反対側の敵陣である黄団の方に向かった。誰だろうと目を凝らす。なんとそれは優だった。優は黄団でただ一騎残っている騎馬の元へ小走りで近づく。村上君が優に気づいた。さつと騎馬から離れ優を迎える。優は身振り手振りを交えながら村上君に話しかけている。村上君は厳しい顔で何度もうなずく。もちろん話している内容はわからない。でもその目の真剣さ、しっかりと結ばれた唇、力強く交わされた握手を私は見た。ほんの十数秒の出来事だったが、私はその一部始終を見届けた。二人のやりとりと表情を、目に焼き付けておこうと思った。

村上君は素早く持ち場に戻った。騎馬の三人は、鎧と鞍を造る手を組み直し、体勢を低くした。村上君は勢いをつけて騎馬に乗り込んだ。黄色の鉢巻きをきりと締めた村上君は、うっすらと日焼けをしていて、もう白いアスパラ



1540円 (税込/送料共)
 御注文はアジア文化社まで



101

ガスではなかった。私の知らない快活さと厳しさまで携えて、行くぞと雄叫びを上げた。

ついに両騎馬が激突した。相手は五人抜き強者だ。体当たりの衝撃に村上君はのけぞり、崩れ落ちそうになる。騎馬の三人が騎手を支え、押し上げる。反動を助けにして村上君は体勢を立て直した。それを見計らい、相手はさらなる攻撃を仕掛ける。両者、手を掴み合い少しも引かない。後ろに回った方が有利とか、フェイントを掛けるとか、小細工は弄しない。力と力の均衡が続く。土ぼりが多い、応援の声が鼓膜を揺らす。

青い空が広がっていた。遠くには雄大な山々が連なっている。夢のように美しい背景の中、闘いは練り広げられた。村上君はまさにこのグラウンドの頂点にいた。地上から一・五メートルの空間は、より空に近かった。私は祈った。君が今、居る場所は無国籍の空間だよ、思い切り闘ってと。

上半身を弓のようにしならせて、ついに村上君が赤い鉢巻きを奪い取った。それを高らかに青空に掲げた時、六月の陽光が彼の金髪に燃え移り、炎のようにきらめいた。

〔素粒〕18号より転載

素粒 富山県

素粒の来し方行く末

私にとって『素粒』について語るといふことは、この二人について語るといふことと同義だ。ひとりには兼久文治。もうひとりは大黒恵子。二人ともとうに鬼籍の人だが、どれほどの年月を経ようとも、『素粒』においてその存在が薄らぐことはない。

兼久文治は一九二五（大正一四）年生まれ。没年は二〇〇二年すなわち二〇年前になる。兼久文治に創作を教わっていた八名が作ったのが『素粒』、という繋がりにある。兼久文治の勉強会は、はじめはカルチャー教室的なものだったが、じきに枝分かれした。教養を目指すのではなく、文学を目指したいというその分派には、創作の前では誰もが平等、対等、というぴりっとした空気があって、五年遅参した筆者にも心地よかった。兼久文治は弟子が書いてきたものに対して基本的にけなすということをしなかった。ほめる際には具体的に過不足なくほめた。ほめられた当人は師の期待がひしひしと伝わり、理解されていると思えた。そのあんばいが絶妙であった。兼久文治は富山



1994年の兼久文治、大黒恵子、筆者がいる勉強会のスナップ

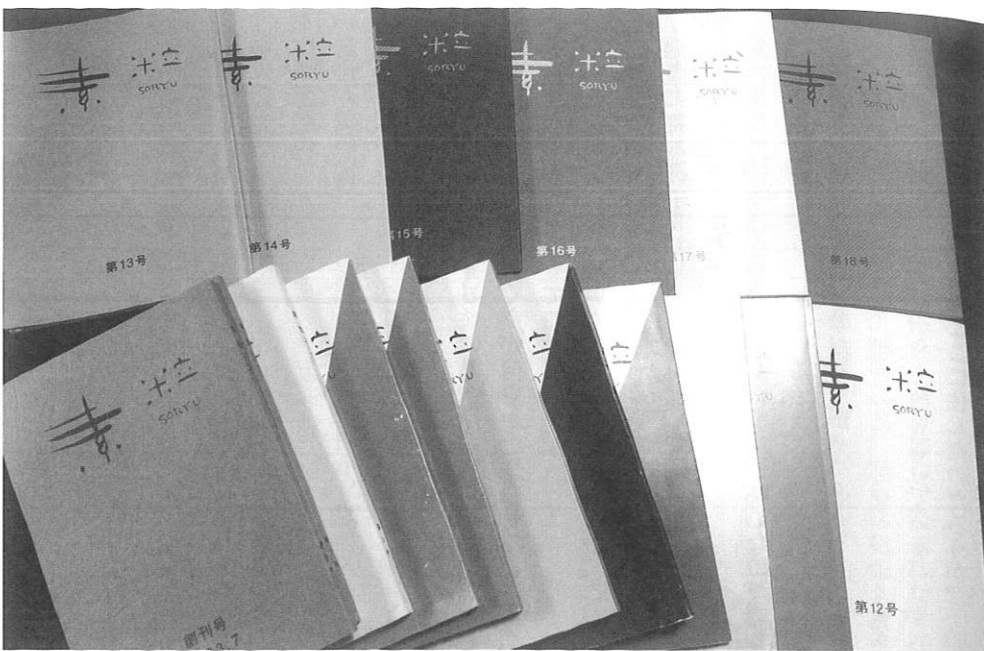


2022年現在の素粒の会合。男性同人一名が来る予定だったが、仕事の都合で来れなくなった。いまはほぼその4名での活動

県内の地方紙北日本新聞（県内購読シェア約六割）の朝刊コラム「天地人」を二二年間七〇〇〇編超執筆した人であり、筆者は結婚で富山に来て、この地方新聞、コラムだけ全国レベルだ、と感じ入っていたところ、奇遇にもその執筆者の勉強会に巡り会ったのである。

兼久文治は富山県内のアマチュア小説書きを底上げしていった人で、富山県の地方紙北日本新聞の文化部長になったのが昭和四〇年。翌四一年に兼久文治は（世間的には北日本新聞社は）「北日本文学賞」を創設する。三〇枚の短編小説の全国公募文学賞だ。おそらく地方文学賞の魁ではないか。選者に丹羽文雄（1〜2回）、井上靖（3〜24回）というビッグネームを招聘する（25回から現在までは宮本輝）。その経緯は芥川賞作家の津村節子のエッセイ「蘇る思い出」（『とやま文学』28号、特集「兼久文治・松原敏の時代」）に詳しい。津村節子の夫は周知の通り「高熱隧道」の吉村昭。兼久文治は夫妻に相談したうえで中央文壇の重鎮丹羽文雄に選者を依頼し、二回目までならという条件で了承を取り付け、夫妻も驚いたというのだ。だが勉強会でそのような手柄話などはしなかった。

昭和六三年に兼久文治は北日本新聞社高岡支社にて創作の教室を始める。そこに生徒として参加していたのが大黒恵子だ。彼女がいかに兼久文治に薫陶を受けたかは、平成五年からともに学んだ私自身がこの目で見ていますが、前出



の「とやま文学」二八号にも弟子の代表といった体で「かの地での先生に、一生徒から」というエッセイを寄せていて、「書く、ということとはこういうことなのかと、凛然とした記憶があります。世界の変わる思いでした」と述べている。こういう感受性の人だから、当然弟子仲間の精神的支柱であった。筆者が大黒恵子のいる月一の勉強会に参加して六七年も経ったところか、兼久文治はさかんに同人誌を作れと言うようになった。だが「私たちは誰一人まともな受け止めようとはしませんでした。精神の有りようも含め、簡単には手の付けられない、大変なことのよう思っていたのです」（『とやま文学』三二号 特集富山の同人誌Ⅰ 大黒恵子「素粒」過ぎ去った十年と、これからと）。そんなわけで弟子たちが何の行動も移さないでいるうちに師は病に斃れ亡き人となった。「葬儀のあと、言い合わせたように生徒、数名が集まり、お茶を飲みながらの想い出話の最中、ふいと思ひ付き、どうします、同人誌、やりますか、と問い掛けました。その場にいた全員が、即座に、やりましょう、そう答えました」（同）。私もその場にいた一人だった。こうして、二〇〇二年に師を喪って、二〇〇三年に八名の弟子で同人誌を作った。『素粒』という名は大黒恵子が提案し、即決だった。兼久文治がいないという事実の中で、勉強会が存在するわけがない。このままこの会が散会、雲散霧消するのは耐え難い、いや、もつ

たいない、教わったことも、人のつながりも。同人誌創刊しか選択肢はなかったのだ。同人の中心はむしろ大黒恵子であったが、彼女はかたくなに主宰という名称を拒んだ。せめて代表とは名乗ってくれと頼んだ。年に一号発行するために、何ヶ月かに一度集い、草稿を批評しあった。師がない。教わったことを思い返しては、先生はこう言われたよね、というふうに励まし合った。子曰くとはこういうことかと論語が身近に思えた。その後同人は増えたり減ったり、長くやっていけば誤解も齟齬も往も来もあった。二〇一四年四月、『素粒』は大黒恵子を病により喪った。大黒恵子が『素粒』のために書いた作品は第一号の五枚の短編で最後となった。

正直なところ、大黒恵子の死で『素粒』は終わったなと思った。孤児のような気分だった。その気分は今も続いている。『素粒』が継続しているのはなぜだろうと考える。創刊時から事務局を請け負っている流れで、原稿が集まれば発行にたどりつく。原稿が集まるのは締め切りを設定するからである。締め切りを設定するのは、大黒恵子が締め切りを設定していたからである。ということは、冒頭に書いた、記憶が薄れ、締め切りのことを誰も言い出さなくなったとき、『素粒』はその役目を終えるのだろうか。とりあえずは片手ほどに残った同人の誰かしらが、締め切りのことを切り出すのである。（文責 白川莊子）

素粒 第12号 目次	
村上君と僕のこと	若果 清子 4
ミツシヨウ・インボシブル	得耳 公心 22
場合	萌木 恵 26
三原色	白川 莊子 48
瞳の中の小豆島	道正 和明 61
挿画 宮本明日香	同人を飾
題字 榎原 保禄	規約
プロフィール	素粒（すゑつぶ）
	74 47 21

「素粒」事務局 〒939・8055
富山県富山市下堀八・一七
道正央子方
TEL076・423・7507

鴉

紺野夏子

空に近いこの部屋はカラスの鳴き声がよく聞こえる。

梅雨時の湿った空に響く声が何事かを知らせるようで、
冴子は思わず聞き耳を立てる。

おまえはここに住んでいた父を知っているのか。この窓
から外を眺めていた父を見たことがあるのか。

窓際に寄る冴子より早く、翼を翻して遠ざかるカラスの
背に声をかけたくなる。

あのカラスは昨日もやってきたカラスと同じなのだろう
か。この辺りを縄張りになっているカラスが、見慣れない人
影に様子をうかがっているのだろうか。

坂の途中に建つこの家の二階からは、町並みがよく見え
る。建ち並ぶ家々の間には小さく海も覗いている。
この景色に惹かれて父はここに住んだのだろうか。

居心地が良さそうだった。

視線を室内に戻すと壁際にベッドがあり、畳まれた掛け
布団と枕がのっていた。長年使いこまれたらしいベッドの
マットレスには人型を思わせる軽い凹みがある。

ここに父が寝ていた。
思わず息を吸い込み、大きなくしゃみが出た。立て続け
にくしゃみをして、鼻をかんで落ち着いた。

冴子はベッドに横たわる老いた父の姿を思い浮かべよう
とした。しかし、冴子の記憶にある父は若いままで止まっ
ていた。

先月のことだった。

お母さんが入院されました、という病院からの知らせに、
冴子は取るものもとりあえず駆けつけた。

冴子を見て母は戸惑ったような笑みを見せた。長年、そ
の総合病院の内科医として勤めていた母が、以前医長をし
ていた病棟のベッドに寝ていた。

軽い心筋梗塞を起こしたらしい。自分で救急車を呼び、
病院の名前を言い、そこへ行って欲しいと頼んだそうだ。
処置が早くて良かったです、病状が落ち着いたら詳しい検
査をします、と母を診察した医者は言った。

二年前に退職してようやく自由な時間ができた母は、一
人暮らしを続けながら旅行や趣味を楽しんでいた。

昨日、冴子は初めてこの家を訪れた。入り口のドアを開
けると、床の埃が見えてそのまま上がるのをためらった。

車にジム用の靴を置いているのを思い出し、それを履いた。
上がったすぐの部屋に小さな流しとコンロがあり、テーブ
ルと椅子や食器を入れた棚があった。その奥の窓のない納
戸みたいな部屋には何やら物がたくさん詰め込まれていた。
それから階段を上つてこの部屋に入った。ドアを開けると
むっと澱んだ空気が押し寄せて、冴子は急いで窓を開けた。
窓の外には様々な形の屋根が連なり、見晴らしの良さにし
ばらく見入った。坂の途中で見つけた家は、立ち並ぶ家並
の中に窮屈そうに建っていた。筆箱の隅に転がったちびた
鉛筆みたいに見えた家は、中に入ってみると見かけよりは

「びっくりしたわ」

ベッドサイドに座るなり、冴子は言った。

「先週会った時は元気だったし、どこか悪いなんて、何も
言ってなかったでしょう」

冴子は目の前の母の姿が信じられない。心電図のモニ
ターや点滴のチューブに繋がれた母の姿は、病人そのもの
だ。母は白衣を着て患者を診る人で、このようにベッドに
横たわる人ではない。

「最近疲れやすいなあと思っていたんだけど……自分のこ
とは分からないものね」

昨年母は、喜寿の祝をした。長年の疲れが出たのだろう。
落ち着いて考えてみれば無理もなかった。

この春、冴子の下の息子も二つ上の長男同様に他県の大
学に進学した。自分で進路を決め迷いなく歩き始めた親離
れの良い息子たちを、頼もしくも寂しくも感じていた矢先
の出来事だった。

不整脈が続き血圧も安定せず、母の入院は意外に長引い
た。冴子は自宅のマンションから車で二十分ほどの病院へ、
毎日のように通った。

その日、母は改まった様子で言った。
「あなたに頼みたいことがあるのよ」

母は枕元に置いているバッグから封筒を取り出した。
「その家に行ってきて欲しいの」

受け取った封筒には住所を書いた紙片と鍵が入っていた。

「何なの、これは」

母は少し間を置くように天井を向き、言った。

「お父さんの住んでる家」

「お父さんの息をのむ。父は芽子が中学生の頃に家を出た。それ以来一度も会っていない。」

「お父さんの家って……」

こんな所で急にそんなことを。

建築士だった父は知人から誘われて遠くの街に仕事に出かけたまま帰らなかった。母とは連絡を取り合っているようだったが、子供には詳しいことは知らされなかった。

——一人で生きたいという人を縛り付けておくわけにはいかないから。みんな不幸になるだけだから——

繰り返して母は言った。

父は不幸だったのだろうか。家族というより一人の方が幸せなのだろうか。では父親がいなくなった私は不幸ではないのだろうか。中学生の私は繰り返し考えた。

五歳離れた兄の雅史は父親のように頼りがいがあったし、母は忙しい中でも十分に愛情を与えてくれた。父がいた時から家事をしてくれる人が通いで来ていて、毎日の暮しに変わりはなかった。

父がいなくても何も困らず毎日が送れる、それが父が家を出た最大の理由だったのかもしれないと思ったのは、芽

「ここにお父さんがいるの?」

母は小さく首を振った。

「分らないのよ。最近メールがこなくなって。だから見てきて欲しいの」

「メール? お父さん、メールをするの」

いなくなつてしばらくは葉書だった。年に一度か二度、簡単に近況を知らせてきていた。考えてみればもう随分父からの葉書を見ていない。自分の生活に気を取られて、あまり思い出すこともなかった。

「メールぐらいしますよ。簡単なもの。好きな時にできるし。たまにだけど。それがなくなったのよ、このふた月くらい」

一つの間に二人はそんなことを始めていたのだろうか。兄や私の知らないところで、どんなやりとりをしていたのだろうか。

驚きが収まらない芽子は、父がいるという住所を見つめる。隣の市だった。そこには芽子の友人がいて、幾度か行つたことがあった。車で高速を飛ばせば一時間ほどの距離だ。そんな近くに父はいたのか。

母は続けた。

「最近まで確かに住んでいた家なの。もしかしたら、どこ

かの病院にいるのかもしれない」

「お母さんのことは知らないのね」

母が入院しても父から連絡があった気配はない。

「あの人は私が病気になるなんて思っていないから。病弱なのは自分だと思ひ込んでいるから」

母は言つて、ちよつと笑つた。

体調を崩した父が母の勤める病院を受診したのが二人の出会いだった。初めから二人の関係はそのように決まっていたのだ。

その頃、父は大学の建築科を出て工務店で働き始めたばかりだった。受診を続けるうちに次第に打ち解けて交際が始まり、やがて結婚した。収入も年齢も母の方がずっと上の、周りが驚く結婚だったが、母の両親にしてみれば相手がよほど非常識な人でなければ良かったようだ。

思いがけずあなたたちが生まれたし。孫を抱けるなんて諦めていたからねえ。

芽子を可愛がってくれた祖母はいつも言っていた。一人娘の母は、勉強ばかりして男の子には目もくれなかったぞうだ。

頭の良い自慢の娘だったけれど、それだけじゃあ、十分じゃないから。人並に結婚して子供を産まないとねえ。

そう言っていた祖母は芽子が高校生の頃に亡くなった。開業医をしていた祖父もその一年後に亡くなった。

母は祖父の医院を継がなかった。長年通っていた祖父の

患者たちには、それぞれに見合った通院先を紹介したり、自分の病院の患者にしたりした。

開業医はいろいろ大変です。とても父のようにはできません。

母はそう繰り返して頭を下げていた。

父のことがなければ母は医院を継いだかもしれない。芽子はふとそんな気がした。父が家を出ても母は変わらず淡々と暮らしていたが、母の心は見かけよりも穏やかではなかったのかもしれない。

小さな医院経営は何かと気苦労が絶えない。極端に言えば夜間も休日もない毎日だ。どうかすると、日常生活にも患者さんはどんどん入り込んでくる。芽子は祖父母が二人で旅行するのを見たことがなかった。開業医の日常は周りがうらやむほどの暮しではない。家庭を覗かれる。それを母は避けたかったのかもしれない。父のことをとやかく言われるのを嫌ったのかもしれない。

父との結婚を祖父母は大らかに受け入れたが、周りの親戚はそうではなかった。医者か大学教授、男はそのどれかになり、女はその職業の相手を選ぶ、それが当たり前と思つていよう一族だった。その中で父は明らかに異質で浮いていた。親戚の集まりがあると、着慣れないスーツ姿の父は、誰と話すでもなく隅でひっそりとビールの入っ

たコップを傾けていた。幼い冴子の目にも寂しそうで、いとこたちと遊んでいても目の端にいつも父がいた。

「いつからここにいたの。こんな近くに」

冴子の声は少し尖った。

「五年位前かしらね」

「何も言わなかった」

「居場所が分かっていたらいいから。これまでもそうだったでしょう」

「でも、こんな近くに」

「病気がね、悪くなったのよ。心細くなったんでしょ。家に帰るように言ったんだけど、それはできないっていうから……」

母はちよつと遠い目をした。

「ともかく行ってみてちょうだい。お願いするわ。私のお見舞いは良いから」

一日中ベッドで寝ているとそれが気になって仕方がないと、母の目が冴子に訴える。冴子は頷いた。

母には頷いたものの帰宅した冴子は迷っていた。いまさら父に会ってどうすればいいのだろう。父がいなくなってしまうのはいろいろ思うこともあったが、やがて大人になり結婚をし自分の暮しに追われている内に、いつしか父の不在に慣れてしまっていた。急に父の所在を知らされても、

穴に入れると、かちやりと回った。

その日帰宅して、母に電話をした。家は見つかったけれど、父はいなかった。家の中は意外にきれいだったがしばらく誰も住んでいないような感じだったと伝えた。

「何か書置きでもなかったの」

母は言った。

「見なかった。そんなにあちこち探さないわよ。あまり長居するのどうかと思つたし」

「あの人は大事なものはベッドの周りに集める人だったから、もう一度見てきてちょうだい」

母は少し強い口調で言った。子供の使いじやあるまいし、ただ見て来ただけなんて。そう言われているようで冴子はむっとする。

母にはまだ夫かも知れないが、あの人はずっと前に出て行った人だし。

父がいなくなつて、兄も冴子も傷つかなかつたわけではない。

もう俺たちの父親をやるのが嫌になつたんだろう。親父なんかいなくてもちゃんと生きてみせるさ。

そう言っていた兄は、優等生人生を突き進み、母と同じ職業についている。同級生と結婚し、三人の子供もみんな医学部に進ませ、絵に描いたようなエリート一家になつた。

戸惑いが先に立つ。一晚考えて、とりあえず家を見るだけでも見てみようとした。後のことはそのとき考えよう。カーナビに住所を入れると地図が行先を示した。本当にあった。少し安心して車のアクセルを踏んだ。

海を左手に見ながら走る高速道路は快適で、ドライブの目的はどうであれ、冴子の心は浮き立つ。冴子は運転が嫌いではない。夫よりも上手いと密かに思っている。

「ココデアンナイハシユウリヨウシマス」

ナビの画面が止まった。坂の両側に民家が並んでいた。

手ごろな空き地に車を止めて辺りを歩いた。どの家も普通の家族が住んでいる雰囲気があった。住所表示を確かめながら、この近くのはずだがと辺りを見回す。風が舞った。

雲が動き、陰っていた陽射しが戻り家々の屋根を照らした。冴子は立ち止まって汗を拭いた。

上空にカラスが飛んでいる。一羽、二羽。番なのだろうか、戯れるように飛びながら小さな屋根に降りた。その家は横幅の広い安定した二階建ての間に、肩をすぼめるように建っていた。少し歪んだ青い瓦屋根にとまる二羽のカラスは、その家の守り神でもあるかのように下界を見下ろしている。どんな家……冴子の足が自然に動いた。細長い二階建ての、窓の小さな家だった。人の気配がせず、表札もない。古ぼけたチャイムがついていて、試しに押してみるが反応がない。冴子は母から預かった鍵を取り出した。鍵

そんな兄をよくやるなあと眺めながら、冴子は地元の大卒に進み、そこで知り合った先輩と結婚した。夫は転勤のない地元企業に勤め、二人の子供ができて平凡だが幸せな家庭を持った。父親が健康でしっかり働き、母親は家庭を守り子供を育てる、それだけが望みだったと言えるかもしれない。この人なら家族を捨てて出て行くことはないだろう、そう思つて結婚した。

兄の結婚の時も冴子の結婚の時も父は来なかった。母は一応知らせたが、病氣療養中の為に欠席しますという、いつもの返事だった。

確かに父は原因の分からない消化器の不調を繰り返して、やがてクローン病と分かった。それからの母は父の体調の管理に努め、油や繊維の多い食事を摂らないように、親しい栄養士に頼んで父用の献立を作ってもらった。和食中心のそのメニューと他の家族用のメニューの二本立ては、父が家を出るまで続いた。最新の医療では食事療法はそれほど必要ではないらしかったが、母はやり方を変えなかった。栄養のバランスの良い食事、規則正しいストレスのない生活。父の体に関しての母は、結婚しても厳格な主治医のままで、父はたまに不平を言ったが、ともに相手にされなかった。

クローン病は政府指定の難病なので、母の判断はやむを得なかつたのかもしれないが、父中心の生活が長く続くと

家族みなが同じ病気になったような気分になった。何より父が一番窮屈そうだった。自分がいなければ全て丸く収まる。父はそう思ったのかも知れない。

母の希望を容れて翌日も父の家に行った。埃除けのマスクや軍手やごみ袋を用意した。薄めのコーヒーを入れたボトルも持参した。

家の傍には車が一台置けるほどの空き地があり、そこに車を入れた。上履きに履き替え、まず一階の窓を開け、空気を入れ替えた。台所で水道が使えるのを確認するとトイレに行き、持参したペーパーで便座や床を拭いた。長居すればトイレも使う。ここに父がお尻を載せたのだと思いつながら、丁寧に拭いた。それから二階に上がり、窓を開けた。カラスの声がにぎやかに聞こえた。空を飛ぶカラスが、二階の窓からは目の高さに見える。黒い影が冴子の目の前を横切る。カラスの目が冴子を捉える。昨日鳴いていた同じカラスだろうか。もしかすると、父の友達のカラスだったのかも知れない。冴子はふと思った。

ベッドの周りを改めて見回す。

机があった。パソコンが載っている。デスクトップの古い型のパソコンだ。父はこのパソコンで母とメールのやり取りをしていたのだろうか。コンセントが差し込まれたままになっている。電源を入れてみようかと思っただけ、やめ

どれも父の細かい気づかいと遊び心が見て取れる、使い易いがちょっと変わった姿をしていた。父がいなくなった後も父の作品が家のいたるところにあり、それはまるで父の代りに冴子たちを見守っているようでもあった。

いつも家にいる父に懐いて、三度の食事もお風呂も一緒にだった冴子は、中学生になると父よりも友達というのが楽しくなった。お風呂と一緒に入るのはずっと前にやめていた。学校から帰るといつも家にいる、そんな父が疎ましかった。

その頃、父は大学時代の友人からの仕事の依頼を受けた。幸い体調がよく、飛行機で出かけるような遠い街だったが、母も承知して送り出した。沢山の薬と生活上の注意点を書いたメモを母から渡された父は、勇んで出かけて行き、そのまま帰らなかった。

父が帰らなかったのは自分のせいかもしれないと冴子は思うことがある。たまに言い争いはしていたが、父と母は決して仲の悪い夫婦ではなかった。それなのに兄は父に冷たかったし、冴子も父を遠ざけた。父の不在は私たち兄妹にも責任があるのかもしれないと冴子は思っている。

けれど兄は、父の作った机を使い続け、自分の子供が学齢期になると、その机をきれいに修繕して与えた。次の子には冴子の使っていた机を欲しいと言ってきて、冴子は驚きながらもどうぞ、と答えた。兄に三番目の子供ができた。

た。他人のパソコンを覗くのはやめよう。もし見るとしたら母だろうと冴子は思う。

それより机が気になった。昨日気付いていたのだが、背もたれにひょうたんの形のくりぬきがある。父はまだ、ひょうたんが好きなのだろうか。

父は兄や冴子が小学生になる前に、自分でデザインし材料を調達して数日かけて机を作ってくれた。出来上がって冴子は歓声を上げた。

椅子の背にひょうたんがあった。ええ、なにこれ？ 幼い冴子は言った。ひょうたんだよ。ふーん、へんなの。冴子はその不思議な形をしばらく見ていた。面白いと思わないか？ 小さい丸が頭、大きい丸がお尻、お尻を振って楽しそうに踊っているみたいだろう、冴子もそのうち好きになるよ。父は明るく言った。

父の作った机の角の手触りが良くて、冴子はいつも撫でていた。体の成長に合わせて椅子の高さを調節でき、大学生になっても使い続けた。頑丈で、三段の引き出し付きの使い勝手の良い机だった。

父は大工仕事が好きで、大工さんになりたくて建築家に進んだ。けれど体調を壊して思うように仕事が出来ず、たまに会社から回してもらったデスクワークを家でしていた。退屈を紛らわすように父はいろいろな物を作った。庭のベンチ、おもちゃ箱、本棚、ペン立て。

とき、どうするのだろうと思っていると、知り合いの家具工房に頼んでそっくりの机を作らせた。

冴子にしてみれば父そのもののような机なのに、兄はどういうつもりでそれを自分の子供に使わせるのだろう。

使い勝手がいいからに決まっているじゃないか、それ以外に何があると言うんだ。

兄はうるさそうに答えた。

ベッドの周りを探しても、父の行先の手掛かりは見つからなかった。こうなればパソコンを開けるしかないのだろうか。冴子は一息入れようと階段を下りて台所へ向かった。テーブルと椅子の汚れを拭き、椅子に座る。これも父が作ったのだと分かる、懐かしい肌触りだった。父は必ず家具の角を丸くする。幼い兄や私がつつかつてもけがをしないように。

台所の隅には、コップ代りらしい空のワンカップが置いてある。相変わらずお酒は飲んでるんだ。飲んでるということは体調は悪くないのだろうか。この病気は煙草はいけませんが酒は良いんだと父はよく言っていた。母もたまにお相伴をしていた。父の体調が落ち着いているときで、二人を見る冴子の心も和んだ。

一人になっても父はお酒を飲んでる。ワンカップを見つめる冴子の喉に熱いものがこみ上げた。

父に会いたい。長年胸の奥に沈んでいた思いがむくむくと湧きあがり、牙子は戸惑う。何十年前も前に出て行った人なんか、とつくに忘れたはずなのに……牙子は温くなったコーヒーをぐいと飲んだ。

玄関の方から人の声がする。耳を澄ます。
「だれかいるのかい？」

年配の男性の声だ。

部屋を出ると、玄関に杖をついた男性が立っていた。
誰だろう。お互いに不審な眼差しで見つめあう。

「高木さんの家の人かい？」

男性は言った。

「はい。何かご存じでしょうか。父が住んでいたようですが……」

ほう。男性は値踏みするように牙子を見ている。

「娘さんがいると聞いてはいたが……。車があったのでね。」

「この大家なんだが」

牙子はあわてて深く頭を下げる。

「それは存じません。はじめまして」

自然に言葉が出た。

「探しに来たんだろう、幸之助君を」

「はい。どこにいるかご存じですか」

「彼は入院しているよ。大分悪い」

やはりそうか。牙子は少し息を継いだ。

礼を言って、牙子もお茶を飲む。美味しい。

「近くに湧き水の出るところがあって、わざわざ水を貰いに来る人がいるくらいでね」

畑さんは目を細める。父もこの水を飲んでいたのでだろうか。牙子は舌の上で転がすようにお茶を味わう。

「五年位前かな、幸之助君が来たのは」

ようやく畑さんは話し始めた。

「初めから、あの家を貸してほしいと言ってきたね。……あれは死んだ息子が道楽で作った家で、人が住んだことがなかったから、どうしようかと思っただが」
空になった湯飲みを置いた牙子は、先を促すように畑さんを見た。

「息子は、もともと体が弱くてね……ちょうど四十九日から、済んだばかりだった。門から息子の年恰好に似た人が来るから、女房と驚いてね」

それでつい家に招いた。何か訳がある様子で自分のことはあまり語りたがらなかったが、家賃はちゃんと払いますからと言われた。誰も住んだことがないし、倉庫代わりに荷物を入れているからと言うと、ひと部屋で十分ですと言ったね。まあ、息子が思い付きで小さな台所やトイレを付けて、出来たときは隠れ家みたいだろう、と喜んでいて。あそこで何をやりたかったか、今となっては分からないが……電気や水道は通っていたし、住むには住めた。家具は

「……どちらの病院でしょう」

畑と名乗った大家さんは、ともかく家に来なさい、話があると牙子に言う。急いで家の戸締りをして大家さんの後に従った。

歩きながら、大家さんは辺りを見回して言った。

「この家もあの家もみな私が貸している。ここらあたりは前は雑木林で何にも役に立たん土地だった」

大家の畑さんはいつこの間のことのように話した。昭和の頃か、戦前の話か。ずっと昔のことだろうと牙子は聞いていた。

畑さんは立ち並ぶ家の間の抜け道に入った。そこを過ぎると大きな家が現れた。門を入ると手入れの行き届いた広い庭があり、敷石を伝って玄関に入った。座敷に通されて朱塗りの丸い座卓の前に座ると、中年の女性がお茶を運んできた。

「息子の嫁だ」

紹介された女性は伏し目がちに頭を下げ、小さな声でいらっしやいませと言うと、すぐに下がっていった。陰気な印象だ。

胡坐で寛いだ畑さんは、

「まあ、茶でも飲んで」

と湯飲みを持った。

「愛想は悪いが、茶はうまいよ」

なかったが、必要なものは自分で作りますと、リュックから大工道具を出した。そんなもの抱えてきたんじやあ重たかろうとびっくりしたよ。ずいぶん痩せていたからねえ。断れなくて、いや、女房が乗り気になって……。

畑さんはふと口を噤むと、口元を綻ばせて言った。

「息子は蔵之介というんだよ。昔はあそこに蔵があって、先祖代々大事にしていた蔵で、それで名付けたんだが、先の地震で壊れてしまった。壊れるような蔵の名前を付けるから病気になるんだって女房は泣いてね……幸之助なんて人がやって来るなんて、これも何かの縁だろうと思っただ」

牙子は言った。

「父とはずいぶん会っていないんです。私が子供の頃に家を出たので」

「うん……。何か事情があるのは分かっていた。でも、悪い人じゃないのもわかった。だから貸したんだ」

「お世話になったのでしょね、父は」

「家にあつた布団や鍋や茶碗を運んだよ。始末に困るくらい沢山あつたから、かえって片付いたと喜んでくれないだ。女房は息子の服を抱えて行ってねえ。体格が同じくらいでびったりだった……うしろ姿が息子に見えて、思わず蔵之介と呼ぶこともあつた。彼は大工をしていたらしくて、家のあちこちの修繕をよくやってくれた。何軒かある貸家の修理も簡単なことはできたから、ずいぶん助かった。女房

は何かというと頼りにして、電球が切れた、雨樋が詰まったなんて言っては幸之助君を呼んでいた。それも、昨年倒れてそれっきりだ」

「奥様も亡くなられたのですか」

「うん。今はあの嫁と二人だけだ」

畑さんはからりと言った。

「……女房が亡くなった頃、幸之助君も悪くなってねえ。病院に行くように言っただが、いつものことだから寝ていけば治ります、薬は奥さんが送ってくるから大丈夫ですと言っていたよ。こちらも女房のことで頭が一杯で、気がついたときは……」

畑さんは言い淀んだ。芽子は次に何を言われるのだろうかと思案を構える。

足音がして、お嫁さんが現れた。

「お義父さん、そろそろ病院へお連れしましょうか」

「ああ、そうだな。それが良い」

畑さんは、ほっとしたように答えた。

「私の車でご案内します」

お嫁さんは芽子に言うのと、身軽に玄関に向かう。

芽子は畑さんに挨拶をして立ち上がった。ようやく父に会えるのだと心を引き締める。

玄関から家の裏手に回っていくお嫁さんの後を追う。見上げるような柿の木の梢でカラスが鳴いた。お嫁さんは立

ち止まり梢を見た。芽子も立ち止まった。カラスと視線が合ったようだった。

「この辺り、カラスが多いですね」

「ええ。カラスは人に近い鳥ですから。高木さんはカラスが好きでしたよ。二階の窓でよく遊んでいました」

やはりそうだった。あの家の二階の窓を開けてカラスを見ていた父の姿が浮かんだ。

お嫁さんは車庫にある自動車を出した。赤い軽自動車だ。大きな構えの家には似合わない小さな車のドアを開けて、どうぞ、と促した。言われるままに芽子は乗り込む。ともかく父に会わなければ。どんな様子か母に報告しなければ。芽子は後部座席に身を置いた。

運転席に座ったお嫁さんは、振り向いて言った。

「この車の方が小回りが利いて良いんです。道が狭いところも多いし。わたし玉代と言います」

どうぞよろしくと、玉代さんは改めて頭を下げた。

「高木の娘の石川芽子です。父がお世話になったようで、ありがとうございます」

芽子も挨拶する。それほど不愛想な人ではなさそうで、ほっとする。

裏口から出た車は、やがて大きな通りに入った。

「高木さんは、あなたに会われても分からないかもしれませんが」

父が小さくなっている。水気を無くして、今にも命が終りそうに見える。

お父さんみたいな顔の人は年を取らないのよね。母は、少し背中が曲がり始めた自分の姿を鏡に映しながら、ぼつりと言った。知り合った頃からそうだったけど、今はどう見ても夫婦には見えないでしょうねえ。初めから釣り合いの悪い夫婦だったのよ。

だから出ていかれても仕方がないと母は言いたかったのだろうか。

ベッド脇に座って、芽子は言葉もなく眠る父を見つめていた。父と母、兄と芽子。父のいた頃の家族の光景が次々に蘇る。

「ようやくご家族に会えましたね」

やれやれと言うように笑顔を作った看護師長は、身を乗り出して父の耳に顔を近づけた。

「高木さん、娘さんが来ていますよ。きこえますかー」
遠くの人に呼び掛けるように声をあげた。父の頭が少し動いた。

「さあ、どうぞ呼んであげてください。声は聞こえているはずですから」

芽子は父の手を握った。かさついた皮膚が芽子の掌を刺激する。ハンドクリームを塗らないと。ほんやり思いながら、父を見た。白く産毛の立った耳朶の小さな、寂しそ

玉代さんは少し気の毒そうに言った。
「父とはもう何十年も会っていませんから、私も分からな
いと思います」

「……意識がはっきりしないんです。混濁というのでし
うかね、いつもとうとうとしていて、話しかけると応える時
もありますが、わかっていないのかどうか……大腸痛だそ
うです。私が行った時はベッドの傍に倒れていて、意識がな
くて。救急車で病院に運ばれて、それからずっと入院して
います。主治医の先生や看護師さんからは、早くご家族を
呼んでほしいと言われていました……高木さんは携帯を
持っていたんですが、それが見当たらずに、奥さんに連
絡をしようにも出来なくて。警察に探してもらおうかと
思っていたところでした」

だからよかったですと、玉代さんは言った。

「ありがとうございます。ご迷惑をおかけして」

芽子は他に言葉が出ない。

病院に着いた。

ナースステーション傍の病室に横たわる人は、芽子の覚
えている父をそのまま縮めたような姿をしていた。血の気
のない黄色い皮膚が張り付いた鼻は鋭く尖っている。白く
なった毛髪と額や頬の深い皺が、父のこれまで生きてきた
歲月を物語っていた。

な耳が冴子の目の前にあった。これが父の耳。父の耳はこんな形だったか。記憶を呼び起こすがはつきり分らない。冴子は少し息を整え、待ち受けている耳に向かって唇を動かした。

「お父さん、冴子です」
声が震えた。

父の反応はなかった。冴子は主治医から父の病状の説明を受けた。癌は全身に転移していてよくてあと一月、もしかしたら明日にでも容体が変わるかもしれないと主治医は言った。主治医に言われなくても父の命が消えかけているのは分かった。

どうにか間に合ったのだと冴子は安堵していた。亡くなってしまつてから知るより、ずっと良い。父がどこかの街の道端でポロのようになって死んでいるのではないかと、ときおり父を思い出すと、その光景が頭に浮かんでしばらく消えなかった。

畑さんが代理をしてくれていた病院の必要書類にサインをした。何があつても文句を言いません、というような書類ばかりだった。

玉代さんと病院を出た。

「……私の主人も幼い頃から病弱な人でした」

車内の重い空気を払いのけるように玉代さんは話し始め

て暮してみたかったです、一人で。叶いませんでしたから。大学は六年かけて何とか卒業したんですが、就職は出来なくて。一人息子だし体も弱いし、とても遠くへ出せなかつたんですよ。義父の知り合いの所で働いたりしていましたが、結局それも続かなくて。一人前の男になるのは夢のまた夢でした、主人にとっては。ですから、あの家は主人の夢の名残みたいなものです……見合いで、子供も望めない結婚でしたけど、一緒にいれば情も湧きます。かわいそうな人でした」

その人の夢の名残の家に父は心を惹かれた。そして冴子もあの家に誘われるように鍵を開けた。冴子は父親似だによく言われた。母親似の兄は、母と同じ職業に就き同じように仕事一筋に生きている。冴子はそのままで頑張らない。何事もほどほどで済ませる。あなたも頭は悪くないのにねえ。母は冴子の成績表を見て溜息をついていた。頑張らないのではなく頑張れないのだといつの頃からか気付いた。

あの家が目に付いたのは、父が冴子を呼んだのかもしれない。

玉代さんが何か言っている。

「奥さんが来たことがあります」

「え」

「仲がよさそうでしたよ。一緒に住めばいいのにと思いました。夫婦は一緒に住まないよ。そうできないわけがある

た。

「主人の母も体があまり丈夫でなくて、ようやく出来た一人息子でしたから、何とか結婚だけでもさせたいと思つたんです。ですから私は、初めから介護人として結婚したようなものです……でも、実家にいるよりは良かったから、年も取っていましたし。私も主人より年上なんです。だから弟みたいにして、優しい人でしたしね」

母がずいぶん年上だと父は話したのだろう。父は玉代さんや大家さんと親しくしていたようだ。父は孤独ではなかつた、それなりに生きていたのだと冴子は改めて思う。「主人は、後はよろしく頼むと言つて逝きました。頼まれなくてもそうするつもりでしたから。主人の両親は良い人たちです。それが一人息子を亡くして、本当に気の毒です。ですから高木さんが来てくれて喜んでいました。良い人でしたよ、高木さんも」

父はどこか陰のある人で、ほつとけなかつた。あるとき、母は言った。主治医だったし、私が付いていないと危なかつかしくて。ほら、そういう男の人いるでしょう。だから結婚したのよ。お父さんはどこに行つても女の人に親切にされる、そういう人だから。ある時、母は思いを吐き出すように言つていた。

玉代さんは続けた。

「主人はね、あの家に住みたかつたんですよ。親から離れ

のかもしれない。高木さんも意外に頑固で。体の弱い人は妙に頑固になることがあるんです。心まで病気になるというか。それで私も、主人によく困っていましたから」
玉代さんは何かを思い出すように微笑んだ。
いつだろう。

「ここに来て間もなくだつたと思います。挨拶をしに来られましたから。ご主人は放浪が好きで、気ままな人だからと笑つておられました」

驚きが収まらない冴子をのせたまま、車は停まった。

玉代さんに送られて父の住んでいた家に向かう。畑さんの家の裏側からは、すぐのところ細長い壁が見える。声を掛ければ返事が返ってくる、そんな距離だ。

「近いんですね」

思わず冴子は言う。

「ええ。蔵があつた所です」

答えた玉代さんの頭上でカラスが鳴いた。何か話しかけているように聞こえた。

「今はないから」

玉代さんは両手を広げて振つて見せた。

「おにぎりが好きなんですよ、あのカラス」

カラスは木の枝に止まつて、玉代さんを見ている。よく見るともう一羽、木のてっぺんに止まつている。カア、カア、カア。交互に鳴く。早くちようだいと催促しているようだ。

「高木さんがね、餌付けしたんです。食べかけのおにぎりを投げてみたら、さっと飛んできて啜えたそうです。それが気に入っていつも来るって言っていました。カッパシ入りが特に好きで、番で来るんですよ、いつも。カラスは夫婦仲が良いんですって。一生添い遂げるそうです」

あの家の屋根にとまっていたのはこのカラスだったのだろうか。二階の部屋にいる冴子に呼びかけるように鳴いていたのはこのカラスだったのだろうか。

「カラスが教えてくれたんですよ、高木さんのこと。庭に出ると煩いくらい鳴いていて。いつもとは違う鳴き声で、見てみると、二階の窓の前でカラスが騒いでいたんです。それなのに高木さんが出て来ないから胸騒ぎがして、見に行くと倒れていたんです」

そのままにならなくて良かったけれど、もう少し早く気が付いていれば。玉代さんは言った。

「主人もカラスが好きでした。餌付けまではしませんでしたが。どこがいいのか、体の弱い人はカラスを好むんでしょうかね……」

そんなことはないんですけど、カラスを見ると主人を思い出すんです……玉代さんはカラスの向こうの空に視線を送った。

この人は、父と一緒にカラスと遊んだのだろうか。仲良く二人で餌を与えていたのだろうか。いったいどれくらい

窓を開ける。辺りを見回すがカラスの姿はない。今は近くの森で羽を休めているのだろうか。父はどんな声でカラスを呼んだのだろうか。名前を付けていたのだろうか。

冴子はこれまで、カラスを可愛いと思ったことはない。ごみを出すと襲ってくる、いやな鳥だった。近づいてくると意外に大きく、まるで黒い飛翔体が空から降って来るみたいに迫力があった。尖ったくちばしは凶器そのものだ。餌をやるなんて、考えたこともない。

いつから父はカラスが好きになったのだろうか。それほど寂しかったのだろうか。いや、人間よりもよほど鳥の方が付き合いやすかったのだろうか。

冴子は父の机に視線を移した。改めて見ると、冴子の使っていたものより一回り小さく、引き出しはない。飾りのひょうたんも少し歪んでいるし、仕上げも雑だ。父の腕はずいぶん衰えている。病気のせいなのか、年のせいなのか。そんな体で大工仕事をしていたのだろうか。頼まれれば断れない父だった。

椅子に腰を下ろす。ぎい。軋んだ音が部屋に響いた。

お腹が鳴った。腕時計を見ると午後三時近かった。冴子はバッグからおにぎりとお茶のペットボトルを取り出した。病院で主治医を待つ間に玉代さんが買ってきてくれたものだ。おいくらですか？ という冴子に、四百円いただきま

親しかったのだろうか。父はどんな笑顔を見せていたのだろうか。

思い乱れながら冴子は玉代さんに礼を言い、別れの挨拶をした。

疲れていた。少し休みたかった。玉代さんの姿が見えなくなるまで車に乗り込み、シートに背をあずけ目をつぶった。一度にあまりの事を知らされて、冴子は何も考えられない。少し眠ろう、そうして頭をはつきりさせよう。しかし、脳内のあちこちに火花が飛んでいるようで眠れない。こんな時にはお酒を飲めばいい。坂の途中にコンビニがあった。父の好きだったワンカップを買おうかと一瞬思う。しかし、運転がある。冴子はハンドルにもたれて頭をのせた。全身の力が抜けていく。やがて少し落ち着いて、車のドアを開け外の空気を吸った。

父のいない蔵に似た家は静まり返っている。もう一度父の住んでいた部屋を見てみよう。冴子は鍵を取り出してドアを開けた。二階の部屋へ向かう。

改めて見ると、ベッド傍の床はきれいに片付いていた。

ここで父は倒れたのだ。壁際に服を入れた箱や細々とした物が並んでいる。きっと玉代さんがやってくれたのだろう。初めてこの部屋に入ったとき、案内片付いていると思った。父は掃除などしない人だった。誰かほかの人の手が入っているのではないかと初めから感じていた。

父が好きでカラスも好きだったというおにぎりを、冴子は食べはじめた。梅干し入りのおにぎりはすぐになくなった。お茶を飲み、もう一つを食べようかどうしようかと見つけた。

ばさばさと音を立てて窓辺に黒い影が舞い降りた。カア、カア、カア。おまえはだれだ。なぜここに居るのか。問い質すようにカラスは繰り返す。

カラスは冴子に向かって威嚇するように羽根を広げた。大きい。怖くなった冴子はおにぎりをカラスに向かって投げた。おにぎりは窓際の壁に当たり、セロハン紙が破れた。カア、カア、カア。いっそう激しくカラスは言う。

冴子は立ち上がり、転がったおにぎりを拾おうとした。音を立ててカラスが迫る。嘴が冴子の手に近づき、思わず大きく手を払った。鋭い痛みが走った。おにぎりにカラスが飛びつく。大きな羽搏きに冴子は身体を縮めた。おにぎりを素早く啜えたカラスは、冴子を威嚇するように部屋を旋回すると窓から飛び去った。

急いで窓を閉めた。この家はカラスの家になっている。早く出よう。冴子は階下に降りた。

車に乗り込んで一息ついた。右手の甲に細く血が滲んでいた。ハンカチで傷をしばる。服に黒い羽根が付いている。いつの間にか付いたのだろうか。冴子は羽根を捨てようと窓を開け、手を止めた。いや。捨てることはない。これはカラ

スの置き土産だ。

冴子は羽根を見つめた。

そうか。カラスは自分の縄張りを守りたかったのだ。父と自分の住処を守りたかったのだ。長い間忘れておいて、いまさら勝手に上がり込むなど言いたかったのだ。

冴子は羽根をティッシュで包みバッグに仕舞った。

この羽根を母に見せよう。

冴子はハンカチを巻いた右手でエンジンをかけ、アクセルを踏んだ。

〔南風〕48号より転載



紺野夏子

こんの なつこ

1949 佐賀県佐賀市生まれ
九州大学医学部附属看護学校卒

現在は福岡県福岡市に在住
「百日の記」で中上紀賞受賞
同人誌「南風」編集人

Thai-Combodian Border

五十嵐勉

ノンチャン、 NONGCHAN 聖丘寺院へ

Tsutomu Igarashi

衝撃の新・戦争文学

タイ・カンボジア国境の難民村が、ベトナム軍の攻撃によって壊滅。記憶を喪失して自分の名前もわからない少年は、母を求めて戦闘の地へ帰ろうとする——人間の尊厳を問う「ノンチャン、NONGCHAN」

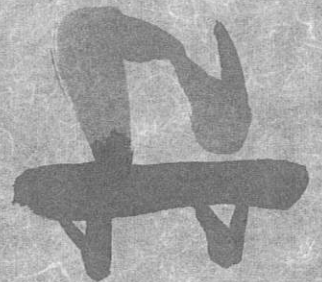
掌の穴から星が見える——虐殺の洞穴から、悪の瘴気が立ち昇り世界へ広がっていく。ムオンの呪詛が輪廻の環を巡らせる——「聖丘寺院へ」

五十嵐勉のカンボジア難民を描いた渾身の力作小説集

御注文はアジア文化社まで 送料とも 1800円

南風

Nanpuu



第48号

小説の書き方

作家を志す人のために

五十嵐勉

アジア文化社

アジア文化社 1000円

サイクロイド

荻野 央

ぼくはサラリーマン二年目に大失恋をした。それは、今から思えば二十代の人生に決定的なもので、喪失感とか後悔とか不幸とかのいたたまれぬ情念にいたる、深い心の傷として心に固着したのだった。心に固着して沈んでいるという状態は「ただごとじゃないな」と当時のぼくは、とぼとぼと、毎日通勤路を歩き続けていた。地面を見つめたり、頭を上げ、太陽の光りが乱反射するビルの窓を見たり、表情のないサラリーマンたちのなかに混じって歩いてきた。恋しているときは毎朝は新たな発見の瞬間瞬間で意味がいたるところに輝いているように思え、時間は無限の可能性に満ちている、と浮かれていたのだが、恋を失ってから、ぼくは自動器械の人形のように生きていた。脚は精製された杖のようであり、何のために会社に向かって歩かなくて

はならないのだろうか、とぼくは自分の影に喋りかけていた。無意味に思える仕事——つまり、生きんがためのパンを稼ぐための仕事。仲間とランチを食べながら、ふと、食べるという行為の意味を考えたりして、「俺はノイローゼに陥っているのかもしれない」と、退勤のタイムレコーダにカードを挿しこみ、夕暮れの街へ紛れていく。そんな毎日だった。

——大谷君、どうだい、仕事の調子は、と部長が声をかけてきた。

——ますます、順調です。

——まずまずか。顔色が良くないな。青白いぞ。君の営業日報は文字数が少ないし、数字も少ない。つまり業務報告

が豊富じゃない。他の連中はこそぞとばかり、わんわん吠えるように書いているのに。

——あの、つまり、やる気がないという風に思われるんですか？ そんなことはありません。ぼくは精力的に仕事をこなしているつもりです。

——うむ。営業部で獲得契約本数は、大谷君はだいたいトップクラスにいるから文句はないんだ。ま、このトップクラスにいる事実がいちばん信頼できるということ、か。でもね、と部長はきよろりとした目でぼくを見たのだ。

——楽しそうじゃないな、と部長はまじめな顔になった。ぼくの肩に手を置いた。

——なんのための仕事か、いやいや……誰のための仕事なのか。目的だ、目的。人生の目的だ。君にそのことは、はっきりしていないんじゃないか？ これがいればね、これが、と太い、竹輪のような小指を一本立てたのである。

——女さ、女。例えば、この女を幸せにするために仕事に向かうとか、ね。恋人、いるのかい？

まったく大きなお世話、考えすぎだぜ、とぼくはデスクを離れた。文字数の多寡とやる気の度数とどうつながるっていうんだい。もともとこんな仕事になんかやる気がないことくらい、このオヤジは気づかないのか。馬鹿な年寄りだな、とそっと部長を睨みつけ毒づいた。恋を失った人間に、それ以外に何をすればいいのか。ずっとわからないま

まで、今いるんだ。もう心は、解けない難問のような縄にがんじがらめに縛られて、どう動きようもない。不自由な身の上なんだ。ぼくはもう一度、失恋前の自由な状態にいたい。なんと失恋とは凄いい打撃であることか。あの女の顔がそこらあたりに満ちているのだ。そんなとき、ふと昔の出来事を思い出した。小学生だった頃、それは純粋な出来事として、今でも響いている。

秋の運動会でこういう団体演技をした。身の丈より少し高めに作られた鋼鉄の円が二重に組まれて、内側に入りこみ、両手で鉄棒を握ったぼくをチームのメンバーが転がり、十メートルほど円転して折り返し点の旗に着くと、くると再びスタート地点に戻るといゲームだ。なかにはひ弱なヤツはその、くると回転する勢いに放りだされて地面に落ちて悲鳴をあげたが、ぼくは割合と臂力が強い方で体重が軽量級だったから、さいわいに放りだされることはなかった。でもかなりぐるぐる回ったせいで頭がクラクラして、折り返し点で、そのクラクラ感が頂点に達したように思った。これは危険だな、と早くスタート地点に戻ってくれば、と願った。ゴールインして、その鋼鉄の輪から出て、地面に倒れた。地面は不安定な大きな円盤のように感じ、その上に寝ているぼくに、真つ青な青空がぐんぐん近づいて来るような気がして、怖かったことを覚えていた。あのときのままだ。円転するリングの中の自分に接近

してくる大空の太陽と雲。ぼくは酩酊していた。しかしその酩酊に、救われたように思ったのだ。決められた時間割の授業。あくびをかみ殺している教師。息もできない狭い教室。それにくらべて、接近する青空の広がりや奥行き、揺れる大地の無限な感じ。くるくるまわるリングの永遠性にそう思った。

二十八歳の時にプロのピアニストの女性と結婚した。一年後に長女が生まれ、二人目の子供は、神の悪戯によって知的障害を持つ者としてこの世に現れた。一人目の子はまだ二歳だったので、ぼくの「平凡で気ままな」な時期はたった二年間だけだったということになるのだ。自在に動きまわり、好き勝手な言動をほしのままにしていた生活が激変した。家庭の幸福を保つという円転する時計と時間が止まってしまったのは、幸福とはいったいどういうことなのか、という問いを浴びせられたことによるものだ。知的障害児を得ると、家族は、いきなり別種の世界に投げ込まれる。それまでの世界が二重になる瞬間の連続を経て、ぎくしゃくと家庭をいとなむことになる。平凡に円転していた生活の連続が、二番目の世界に強制的に局限される。二重であったことを知るわけなのだ。福祉の観念というものは外から投げつけられて始まるものじゃない。他者経験や専門書から与えられるものではなく、自己経験から内発す

そになつて書き散らした文章がある。

「古びた時計屋に相談しに出かけた。時間の流れを止める方法は？ あるいはこの先、時間はいかなる運命を次女に用意しているのか。俺は相談ではなくて質問しに行った。そして時間の流れの中で、俺みたいな福祉の「ふ」の字も知らなかった、興味も持たなかった人間にとつて、福祉の観念はどのように芽生えるのか。それは美しい自己規制の観念だが、一見この世に唯一正しい観念であるように見えることだろう。いや見えるのだ。じつさい施設で働く人々の笑顔が眩しいくらいだから。人の命について二重化された俺は、あらためてどのように自分の気持ちを表せればいいのか。俺にはさっぱりわからない。

『徳って、いったいなんですか？ どういった類いの理念のことなんでしょう？』（時計屋にて。主人は修理に夢中で質問に答えない）『命の価値と重みを測る器械が欲しいんですが』『そんな器械はありません。ここは時計屋です。』

（静かな店内。時は静かに流れていく）
返す言葉はなく、俺はしおしおと店を出たのだった

次女が生まれた後、親友と一緒に、或るお寺に遊んだこ

るものであるはずだ。あるいは、自分で自分を教育しなければならぬ。そのことを痛感したあの時——障害児施設の送迎バスに乗った時、通園バスを奇妙なもののように見つめる人々の不思議そうな、面食らった表情、つまりあちらの、「向こう側」の人々の視線を見出した時。二重性というぼくの世界認識が始まった。薄く濁ったカーテンが世の中を区分けした。普通人たちはそれが見えない。言っておくが、ぼくはぼやいてるわけではない。そのカーテンの存在を問題視しているだけのことだ。或る詩人は、こう書いている。

数年前に足を骨折して、病人用のステッキをついて歩いていくことがある。ステッキをついてみて、はじめて足の不自由な人がたくさんいることを知った。今度は車椅子か？
(田村隆一「ボタン」より)

ぼくと違うのは、詩人は周りを観察して二つ目の現実を知ったことであつて、ぼくの言うのはステッキをついたり車椅子に座るぼくを眺めている、他人の目であり視線のことなのだ。この視線が二番目の世界を告げているわけだ。「新たな二つ目の確認」は、簡単になしうるものではない。それはともかく、次女の「不可解な誕生」からしばらくのあいだ、いたたまれない気持ちでいたその当時、やけく

とを話しておこう。

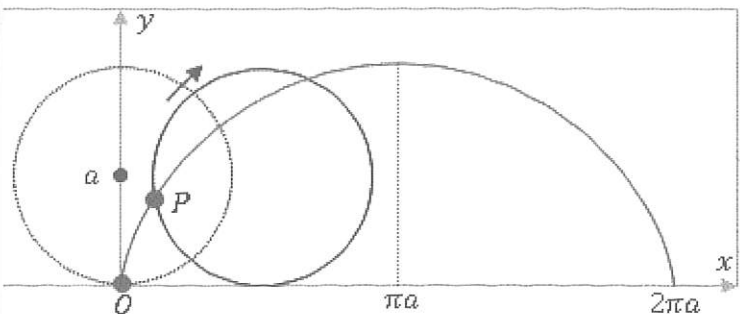
何やら「おもわせぶり」なその寺は北鎌倉の駅から徒歩数分の所にあつて、「わたし」は一年ぶりに連絡を取りあつた友人と、その寺の名物、牡丹園を見に行くことになった。瓢箪型の池が敷地の中央にあり、周りを病的な（と感じてしまった）色の牡丹が大振りに咲いていた。白、黄色、真紅。ゆらゆらと、風もないのに揺れている（ように見えた）。なんとという高貴な花なんだろう、と「わたし」が感動していると、病みあがりの友人がぼつりと言った。

——きみ、なかなか壮絶な眺めじゃないか。よく誘ってくれたね、ありがとう、とまずは礼を言うよ。ぼくは永らく病院暮らしだったので、白い色だらけの物に取り囲まれてる生活を送っていたからなあ。色と言えば看護婦の胸に挿しこまれたハンカチーフのいろんな色、そして食事の内容物の色しかないという具合さ。なんとまあシンプルな年月だったことだ。

——喜んでもらえてよかった。きみの神経が快方に向かったという連絡をもらって企画してみたんだが、うまくいったようだね。

——ああ。くたびれた神経が健やかな感じになっているよ。うだよ。とにかく「かさついていない」と友人は微笑んだ。

満開の牡丹は薔薇に負けないあでやかさを見せ、たとえばダリアとか薔薇の激しいまでの派手さのない花だ。「わ



たしは昔から牡丹の、豪奢でありながら日陰を好むといった性格に惹かれていた。他者を拒む棘はなく、ざらざらとした欲望も持たない牡丹は、貴婦人の高貴さを誇り典雅な匂いを放つ花である。まさに「かさついている」神経にもってこいの癒しがある。池に架かる撓んだ橋を見かけると友人はこう言うのだった。

——危険な橋なのか安全なのか、渡ってみなければ判らぬ。

——何を言いたいんだね。橋にたとえて人生の……、と言

いよどむと、友人は苦笑いを浮かべるのだった。

——病み上がりのほくにそんな高邁な議論ができようものかね。「かさついていた」神経にとつてああした半円状の建築物は不安定に見えるという、つまり話しさ。

——そうかなあ、と「わたし」は、とほけて答えたのだった。

——とにかく行ってみようぜ、と大きな声で、友人は元気が良かった。

次女が生まれる予定日。暗い夜道に雨が降りしきり、ぼくは遥か昔の思まわしい思い出(昔の大失恋)の中を歩いていく。何か危険なことを告げたげな「思わせぶり」の夜道だった。その時ぼくはひどく酔っぱらっていて、ふらつきながら、なんとか社宅に通じるゆるやかな坂道を歩いていた。タクシーが通りすぎていった。人影はなく、しとし

くした。

——たぶんね、良い子供じゃないかもしれない。

良い子供。意味が判らないと、ぶあつく酔った頭で、ぼくはその言葉を繰り返した。「俺はそうとう酔っぱらっているようだな」と畳に突つ伏した。眠いなあ、と言った。

「良い子供、悪い子供」。このの良し悪し、と深い眠りに落ちていった。

*

サイクロイドは、完全な円が直線と接することで、円周上にある定点が、円が回転し始めて、もう一度接線に触れるまでの描く軌跡をいい、橋梁力学的に優れた耐久性を持ち、見かけの美しさも、完べきなものとしてされる曲線の名前だ。皇居の二重橋、あるいはお寺の池に架かる太鼓橋を思いだせば、ああ、あれかと理解されるだろう。待つてくれ、と読者は、ぼくの話

止めるにちがいない。
「どうしてここでその曲線の話になるのかね」
「二人目の子供の不幸を説明するた

と雨が降っていた。陰気な夜、何が待ち受けているかはわからない。門を通って自宅のドアノブを握る。雨音と陰気な夜の空間。湿気は或る感情の表現なのかもしれないと考えてしまい、ぼくは頭を思わず振る。或る感情の表現だっ

て?、とぼくはネクタイを緩め、冷蔵庫から冷やしたペットボトルの水をがぶ飲みした。そんなこと、あるもんか、と椅子に腰かけようとした。

——予感だな、と中腰で言った。誰もいない家。妻は産婦人科にいる。今日が二番目の子供の産まれる日なのだ。二人めは男の子がいいな、と思っていた。しかしだ、とぼくは、どしんと腰を落とした。そうは上手くは、ことは運ばない。とくに生命の誕生の瞬間において、結果がどうあれ神さまの配剤として納得しなければならぬから。女の子かもしれないし、ひよつとして多指症かもしれない。あるいは水頭症。美しい面立ちの男の子なのか、あるいは醜い女の子か。あるいは……。

その日に赤ちゃんは生まれなかった。数日後、またしても泥酔のほくに電話がかかってきた。妻からだだった。ああ、とぼくは大きく息を吐いた。

——どうした? なんかつたか。

——なにを言ってるのよ、産まれたのよ。無事に。

それはなによりだ、とぼく。

でもね、たぶん……、と電話口の向こうで妻は声を重

めに迂回するようだけど、ここから始めないとどうにも収まらないからな」

「収まらない?」

「或る人の不幸に関係ない他の人々は無関心でしかないのだが、しかもそれは実に自然な成り行きの心性だ。健全な者たちは不健全を、平和よりは戦乱を、幸福よりは不幸を、鮮やかな美よりも腐敗した醜悪の存在を何度も何度も繰り返しては、とどのつまり飽いてしまう人間の、破綻した倫理を暗示するものなのさ。だからぼくの気持ち収まらない。さて説明を続けるとしようか。『数学をつくった人々』の著者、E・T・ベルの説明のほうが判りやすい。パスカルの言葉(「ルーレット」と呼ばれている)で理解するのはちよいと面倒なことかもしれないけどね」

「そんな図形ごときで解説し得るものかね、きみの不幸な人ならば……そんな例を持ち出してきみの空虚な生活感埋められないんじゃないか」

不幸だつて! と別の読者から非難の声があがる。

「まず、説明させてもらいたい」とぼくは続ける。

「ベルの説明はこうなんだ」

この美しく釣り合いのとれた曲線(平たい舗石上の一直線にそって回転する車輪の周辺上の一定点の運動によって描かれる)をガリレオとその弟子ヴィヴィアーニ

はこれを研究し、その曲線すなわちサイクロイドが、橋梁において力学的な理由から建築学上他のどんな曲線より優れていることを発見した。

「慢性的な不眠と歯痛に悩んでいたパスカルが、その苦痛を逃れるべく、サイクロイド曲線がどうして力学的に優れているかという問いを解決したんだ。八日間考えている間、彼を襲った痛みは消えていたというから、そうとうに夢中になっていったんだろな。ぼくの二番目の子供は、神の悪戯か配剤なのか判らないが、知的障害者だ。考えてみれば、大きな謎であり神秘ではないだろうか、と思うんだ」

解答を見つかるべく、ぼくは幾つかの関連本を選んで読もうとしたが、どうしても泥酔に逃げる夜が続き、なかなかその任務を遂行できなかった。任務。そう、任務だ。福祉という観念について考えねばならない任務は無味乾燥になりがちで、ぼくは逃げ出したくなっていた。壊れているものに愛を与え、なさねばならぬ徳の行為は苦痛ではない。無償に始まって無償に終わる崇高な善行だ。「福祉」は徳の偉大さの一つの実現にほかならない。ぼくに徳の観念が現われたのは今生きている眼前の世界が、実のところ単一の凶柄ではなかったという発見からだ。健常の世界に並存する「非健常の世界」という二重性。人の四肢は

——先にも言ったようにぼくは永らく病院生活を送っていたので色に関して、戸惑っている（と何か頓珍漢なことを言いたしはじめたように聞こえた）。この世は何色とも例えられないからだろうな。いつそモノクロであればいいのにと思ったことがあるんだよ。多色刷りの書籍やらテレビ、ポスターにいちいち感動したり諦めてしまったり、当方としても困惑するばかりなんだ。疲れてしまっしね。——色ねえ。ところで、こんな詩があるんだが、とぼくは思い出す。

赤は動脈であり青は静脈
慰戯は白であり死は透明と

十字を切らないわたくしは思ったことがある
家具は灰いろ猫は三毛

幾何学的精神はまぎれもない黒
繊細な精神は緑としようかと

あなたは菌や腸の痛みに耐えて
それをより善きものへの心の痛みとした

あなたの大きな目がいつも見ていたのは

健康である場合、健康な思考の作用として運動する。障害がなければ当たり前のことだ。平凡な一日が一枚の平面から二重になり、人々の視線が混乱するときに現われる徳の観念が、平凡な人間に平凡の受容を許さぬかのように、その人の前に立ちはだかる。それはまるで平凡と言う観念が、なんと偽装にしかすぎないことを教える。美しい愛と正義の言葉をもつて立ちはだかり、その人のそれ以外の生活を阻害することもしばしばだ。歯の浮いたような会話や仕草を取らなくちゃならん。ぼくはそう考え、そしてここまでぼくは生きてきた。

「あなたのその意見は異端である。徳の正当性やその理念の不可侵な聖性を冒瀆するものだ」と、読者からの重々しい批判が聞こえてきそうだ。「聖なる理念を侵すこととはできない。許されない」

それを聞いて、いつものように力を失い、だらりと両腕を下げてぼくは沈黙に入る。その種の反論に飽いていたからでもあるし、聖なる意見の素晴らしさは、一枚面をめくれば醜いことを彼らが知らないで、或る意味、のんきな世界に安住していることをぼくは知っている。かくして世の二重性は暴かれることなく連続する時間を構成し、日々が軽やかに作られていくことになる。こうまで詳しく世の二重的な性質を説明すれば、さすがのきみも判つてくれるだろうね。

何いろだろうモノクロームか

そんな気がするあなたの文章を読んでみると
セピアの深い沈んだ色（ママ）

（北村太郎「パスカル」より）

——うん、その通りだ。白い病室に何年も生きていると窓外の出来事は、例えば、風にだつて色を見る。白色が反転するとき、つまり夜のことなんだが、ぼくは暗い物質に包囲されていることをまざまざと実感するから、そうだな、黒を感じるとでも言うべきだろう。それ以外の色は、あつたとしても感じられることはなかった。

——じゃ、今日はきみを誘ったことは正解だったということだ。

——微かく震える病者の心は緑色、いや、緑を求める色合いとでも言うべきなんだろうな。あの頃、ぼくは病院食に飽きて、窓辺に近い木をたぐり寄せて葉っぱを齧ったことがあった。きみの言うパスカルのサイクロイド証明について、苦痛に耐えながら情熱する心を奮い立たせたということとは素晴らしい話だ。ぼくも情熱的に生きたい。きみは幾何が好きなんだね？

——幾何の問題を解くこと、証明の過程に誤りを冒さず、懸命な推論はまっしぐらに完全な解を導きだすから、

とほくは答えた。友人は何を言いだすつもりなのか。

——さつき世界の見せかけの一面性と云ったが、たくさんの人にとって世界はそうだ。健常者の世界は多種多様な認識に満ちているように見える。しかしそれは構造として単に一重だ。障害児が妊婦の産道を通り抜けて世界に登場した時、夫婦に、世界のもう一つの面をさらけ出させたということになる。生活の色々な面で二重的になっていく。多種多様といっても健常という観念において個性はないのさ。一様さ。つまり当たり前のように人間は行動する。しかし知的障害者を持つ家庭はそうはゆかないのだ。当たり前の行動ができなくなる場面に遭遇する。当然なのさ、この良し悪しは別にして。

——いまのきみの話は、きみの体験から来ているらしいね、とほくは半信半疑の顔つきをして見せた。

もう一つの世界はほくを突き刺す。無意識な差別として好奇に満ちた他人の視線は耐え難いものだ。そのことがきみに判るのか、とほくは言いたかった。

——その、良し悪しの判断の根拠が知りたいものだね、とほくは彼の腕をつかむ。細く折れそうで、彼の骨は脆そうに感じた。

——そりゃそうだ。ほくは死を覚悟せねばならない、或る難病患者だからね、と友人は穴のような目でほくを見た。

速くあるいは遅く、そしてまたついて着地する。どう見ても不完全なのだ。ほくは思いだしている。次女が生まれて、三人目を作ろうじゃないか、と妻に提案したがすげなく断られてしまったことを。

——どうしてさ。家族が増えれば……。

——もういいのよ、と妻は不機嫌な顔つきになってほくを睨んだ。

——そういうのは「完全な家族」とは言わないのよ。

この提案は、ほくの勝手な言い訳に過ぎない。言い訳？ そうだ。健常児だったら欠損している円環を補填できるという言葉のじゃないか。もしもそうであるならば、円環はつながれ、こんどこそ家族「全員」で美しく円転できるじゃないか。サイクロイドが描かれると言うものじゃないか、と考えていたのである。くると向こうを向いたままの妻の背中に触れようとした。しかし彼女の背中は固く、ほくを無言で否定しようとしているのを感じた。

何故？ どうして？ 疑問は踏みしだかれてもなお立ち

上がる雑草のように、しぶとい連続をかたちづくる。

結論のない考察は余白を設けて閉じられるべきだ。でも、ほくは答えたい。永遠の難問になるかもしれないけれど。

*

上の娘は小さな頃からこの妹を愛していた。受け答えがギクシャクしても、友だちが奇妙なものを見たように妹を見やっても何ごともないように、二人は仲良しの姉妹であった。上の子はとても自然な娘であった。しばらくして下の娘に先天的な心臓障害があることが判明し、零歳児で早期に手術を行うように医師から説明されて、ほくたちは手術に同意した。「手術が失敗して死んだら……」と妻は不安な表情でほくに言った。「もしももしも、そんなことになったら……」「そんなことは考えないでおこうよ」と返した。「それはそれで、あの子の運命なんだよ」

一部が欠けている円環が復活するかもしれない、とほくは期待した。手術がうまくいって心臓が治っても、知的障害が消えるわけでもないしな、と思いつながら、狭いベッドにとじこめられた次女を見つめているうちに、いや、部分的に治ればいいんだ、欠けて歪んでいる円環はいつかうまく具合に閉じられることだろう、いつか。完全な円の復活はいつか再び形を変えて現れる。それくらいの希望はもっていないはずだ、と、ほくたちは病院を後にしたのである。

円転自在——それは家族の平和と幸福を象徴する動きのことだ。環の上の定点は家族分ある。ほく、妻、上の娘、下の娘の四人分の動き。サイクロイド的に三人は軽やかに美しく動くのだが、次女はそうはいかない。ギクシャクし、

閉じられた円環の世界。時計屋に尋ねても彼が無言のまま仕事を続け、店内の各種の時計の時の刻む音だけが静かに鳴りつづけている世界のように。

〔風の道〕16号より転載



萩野 央

おぎの ひろし
17歳の頃に「詩」のようなものを書きはじめ、幼馴染たちとガリ版雑誌を作り、結婚してからサラリーマンと家と文学の三角形の人生を送ることをやめた。33歳のときに敬愛する父を喪って、なにやらギアが一段上がってきた。ふと気がつくと、顔見知りの仲間がつぎつぎと「退場」していき、我が時間の「在庫」がそれほどない。これはいけないなあ、と反省しながら生きている現在です……よく食べ、よく呑み、よく寝て、正午にラジオ体操をする。古今東西の古典を読み、詩を、小説を、批評を書いています。
1952 大阪市生まれ

「風の道」

○葉山修平のもと2007年9月「風の道」創刊現在16号

○代表 大森盛和 〒272-0107 市川市押切12・26

TEL 047・357・7862

○事務局 吉田慈平 〒116-0003 荒川区南千住8・3・1

TEL 03・3806・4715

○年二回発行 五月と十一月

○会員 現在 15名(東京および金沢)

○入会希望者歓迎 事務局まで

○内容 小説・エッセイ、詩、研究評論、その他